

金毘羅參詣名所圖會一





金毘羅奉詣名所圖會

攝都曉 鐘成編輯

千里川内翻筋下計

全部六冊

全 浦川公佐畫圖

大阪文榮堂藏



おーてるなよは人鷲の舎曉  
鐘成今年の久の早月のうら  
おんもんだる年と狭貫を記  
象頭山とまうらうとみ那月乃  
未中ちのあわりのよはうら  
名くかき海とあしあはる  
んか神廟仏室乃あは









書ふもあはれと請ふもあはれ  
道の繁はかきつゝに花をよめ  
もこもよめくはなをよめ  
あはれもあはれと請ふもあはれ  
あはれもあはれと請ふもあはれ  
あはれもあはれと請ふもあはれ  
あはれもあはれと請ふもあはれ  
あはれもあはれと請ふもあはれ

金二序三

弘化(二)の長月  
あはれもあはれと請ふもあはれ  
あはれもあはれと請ふもあはれ  
あはれもあはれと請ふもあはれ

植松修理權太夫源稚恭朝臣

稚恭



凡例

- 一 此書二國一覽の名勝志の類いにあつては只象頭山参詣の路径と專と  
 一 并に其便宜に随ひ巡覽とては名所と著しりのみあり
- 一 寺社舊跡大概次第小記一巡覽の心と以て著しりしつても旅客往  
 返の勝手よりしては道條の前後に齟齬一行程の損失又無しとも  
 一 つゞべ強ち巡覽の規矩とすべし
- 一 此の古跡彼の廢趾おと漏脱とて所あるべし是ハ魚來斯る冊子にせん  
 一 つゞ紀せしつゞ次第去る夏六月象頭山に詣て一砌之聞及び一  
 遍禮の靈場或ハ名高き神社おと此彼と巡拜一家土産として  
 一 書止りし書坊の需りに固辞しつゞ粗綴りて出故なり
- 一 其境地と妄失して臆氣うる圖と出さば且冬旱の苦熱と勞まら



碑文の寫し得ざるは則ち雲井の御所の碑大夫黒の碑花立碑  
寶藏一覽の記靈驗石木の類ひなり是より再回彼土に渡海一季  
く寫し拾遺の篇に詳くふまへ

一 撰寫密もびて上木がた物にまじりて差むれ再寫して拾遺の  
篇に加之是は白峯山勅額門の隨身判官為義八郎為朝の像水  
笠の岡の西行法師の像一夜庵の山寄宗鑑の像の類ひなり  
一 圓龜の津に渡る八尋く八宿人浪華より船に下向ふはより  
先船中より眺望の名所と租出せむむ棋播の海邊に先板に詳  
おれば是と省れ備前の海濱より著はなり  
一 陸路下向の道條に續くと後篇に著し尚海邊の浦脱せども  
是より加ふ備前兎嶋の北濱西大寺大なるの泊木の類ひなり

金毘羅參詣名所圖會卷之一

目錄

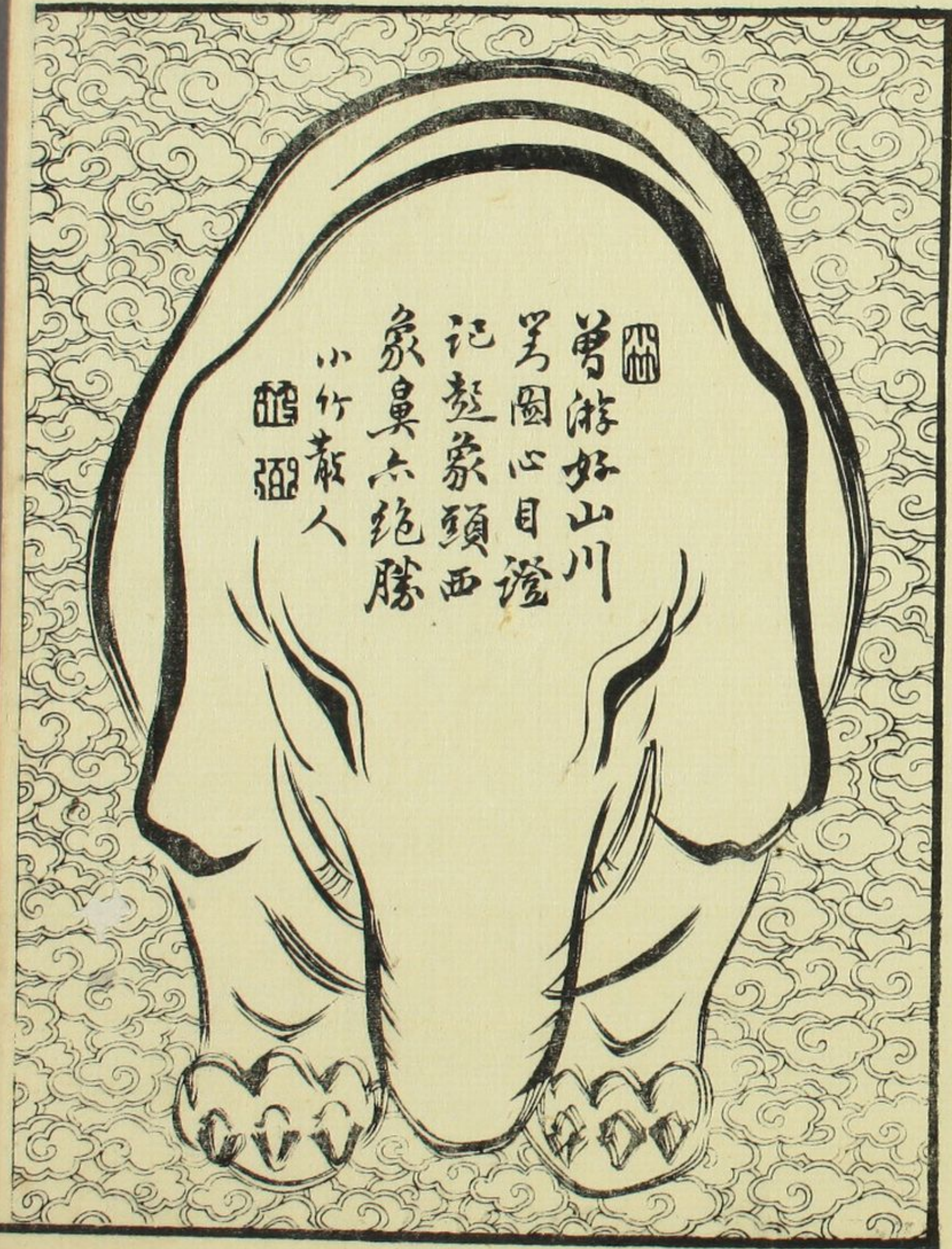
浪華川吊帆圖	虫明の炮門	長嶋 鼠嶋	尻海
牛窓の湊	名産鳥賊指螺	前嶋 小嶋	明神牛と倒伏圖
大島	大石明神	大島の炮門	樫野の濱
出崎 小串の浦	胸上の浦	山田田井宇野	直嶋
新院左遷の圖	琴の鼻	帆うける	重石
鏡岩大師堂	琴麻の濱	日比の浦	日比の塩濱
雄の途	経巻と海底に沈むる圖	渋川	浦田の濱
番童標と拾遺圖	引綱の浦	大師の清水	引綱の天神
唐琴の浦	唐琴の泊	捨揚島	田の口の浦



名産真田織居の圖	下村の浦	嶋の八幡宮	西行乾蛤鞠の図
兎嶋	名産糠麩	瑜伽山ノ鳥居	兒ヶ池
化粧坂化粧石	二ノ鳥居	登道下林駕屋の圖	二王門
瑜伽大権現御本社	幣殿未社	觀音堂	御影堂
金堂	多寶塔	護摩堂	鐘樓繪馬堂
蛭子石大黒石	地藏堂	奥院妙見祠	龍王社
經の尾	鬼墳	蓮臺寺本坊	御守護續所
神馬堂	燈籠堂	通夜堂	茶堂
乘藏院	寂勝院	紫銅鳥居	石川成一の碑
小川橋本	味野赤崎	釜ヶ嶋の古城	官軍絶友合戦の圖
田之浦	天満宮	吹上の濱	新庄八幡宮

下津井の浦	牛頭天皇の社	扇峠	讚陽眺望の圖
祇園御旅所	本庄八幡宮	名産鱒	大島
真那邊	漁夫妻魚と齋の圖	以上備前の海邊	
塩飽七島の圖	本嶋	向嶋荦ヶ小嶋	辨天島
長嶋馬ヶ小嶋	廣島	手島小半島	佐押島
小嶋下二面島	高見嶋	齒節岩	牛島
沙弥島	瀬居嶋	小瀬居島	與島
小與島	寶来嶋	鍋島二面島	羽佐島
岩黒嶋	櫃石島		不登嶋

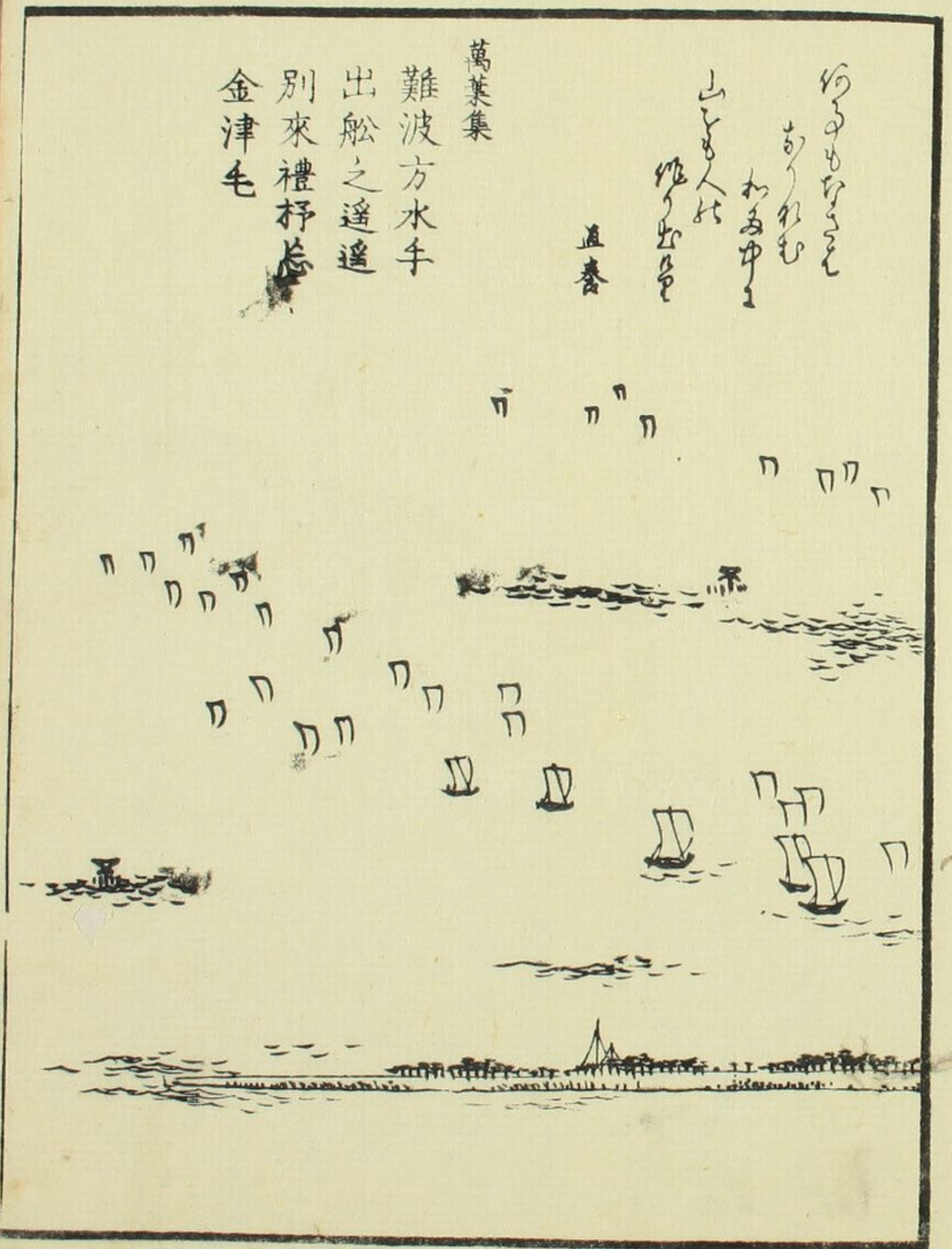






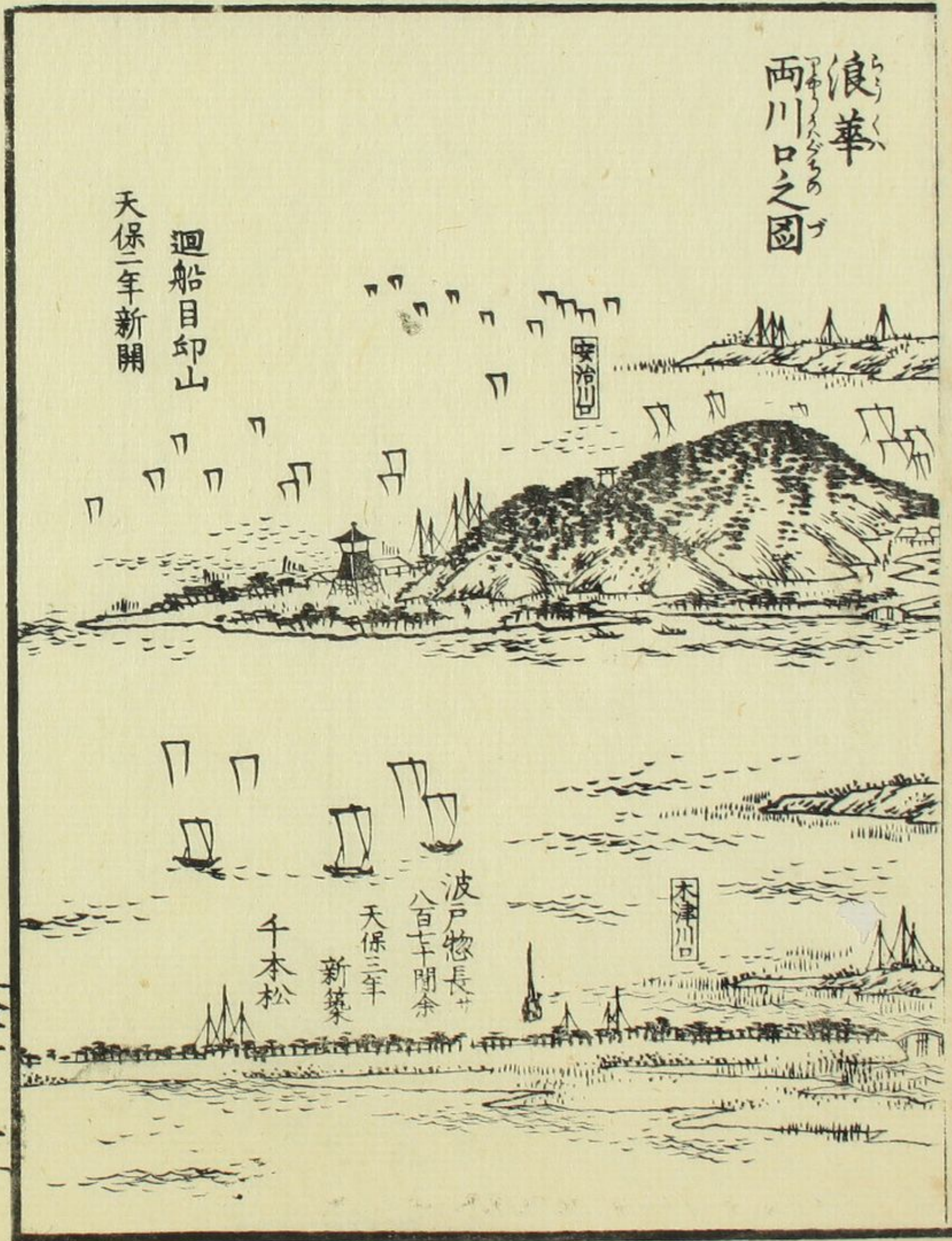
何のゆゑに  
 おもひに  
 おもひに  
 山も人々  
 作らむ  
 道春

萬葉集  
 難波方水手  
 出船之遙遠  
 別來禮杼忘  
 金津毛



浪華  
 西川口之圖

天保三年新開  
 廻船目印山



波戸惣長  
 八百七開余  
 天保三年  
 新築  
 千本松

金一ノ一



金毘羅奉請名所圖會卷之一

杵象頭山金毘羅大権現の靈驗の事  
在り莫諸人々知所して筆紙に  
及ぶ説話の雨有嶮岨と越波清と後此小浦の支障一も暑寒は差別  
も群泰時小南断は就中開東筋りの宿人多し是等の旅客何れ浪其津  
に着し此小嶮洲圓龜の渡海の船も来て彼方不到る故夫坂市中小當出船の後  
駕屋身俗是と金毘羅石と船と金毘羅船欄凡道懐日本橋は西  
なる戎橋の辺嶋之内長堤北は徒屋橋の東西は松海場より日毎出  
船のりて一日も國を度る各船宿は津帳の目標と出て乗船の客は既晩別艦と  
解り川に出し追風と待て發船海上路は凡五十五有餘里根津と播磨備前  
経後岐不到る順風帆と張時一瞬の間彼方に着し其舟理も支言語に  
絶先川と出帆し西宮神多庫瀬磨明石と三鈔磨津佃室の津と経く

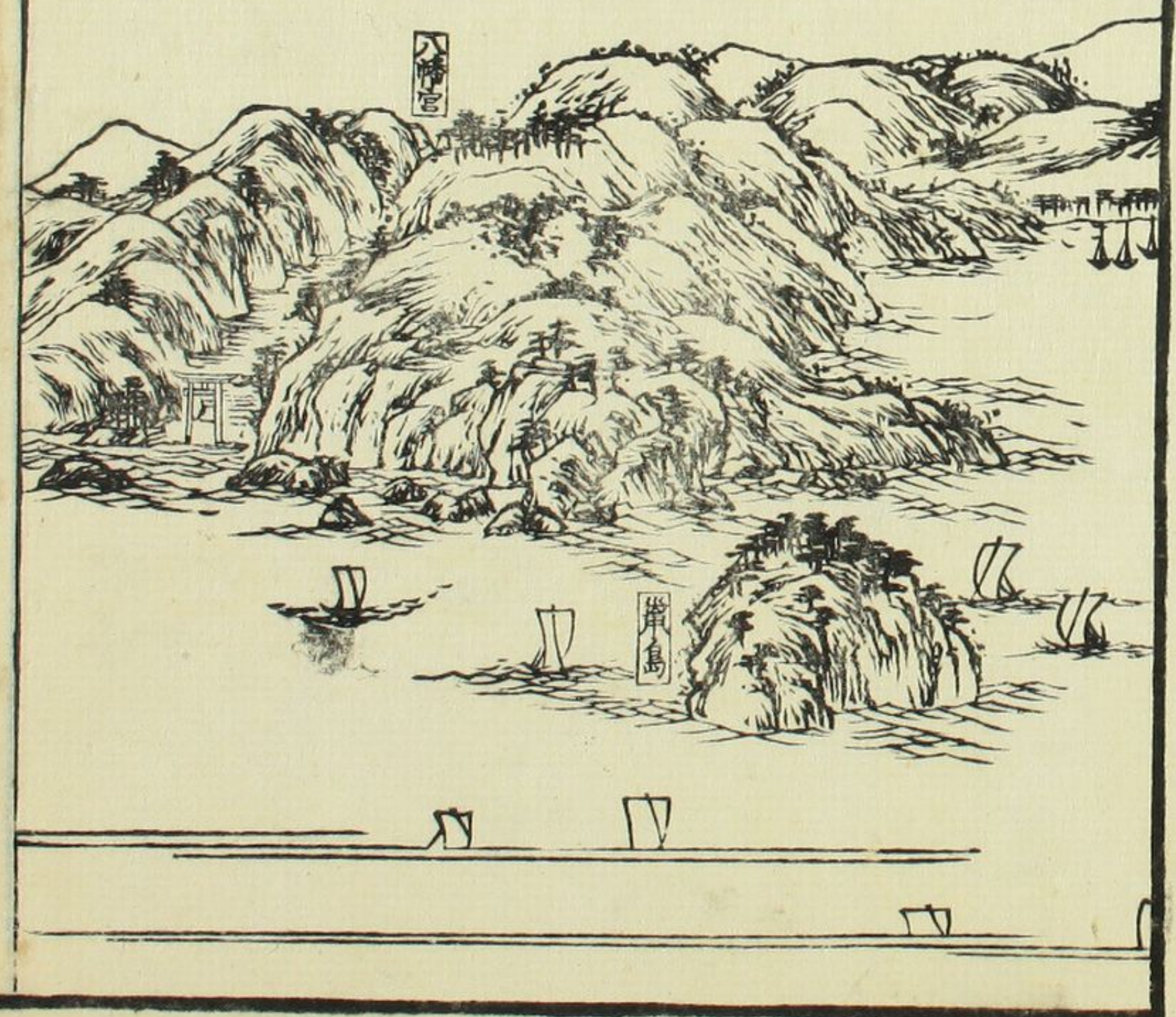
赤穂の岬塩濱小雌手見やう稍備前国半窓の湊小到る則此播磨備前  
先小根津名所圖會播磨名所圖繪小委出れ無益の筆墨と費糸  
及は是と省略備前国虫明の廻門の辺より海長嶋半窓風景と始漸小兜  
嶋郡南濱と眺望し下津井幸追の間に國は尚委々遠くは關西名所圖  
會と題し三備州と始藝防長の古跡と探り山陰道の四地西濱は名所と著る  
欲せ是と移りて詳小口船中して海岸と見渡せりて掻つて記し著  
也然れ金毘羅奉請の陸路も關西の部小出せ且筆と圖あり

虫明の廻門 備前国邑久郡虫明の浦と

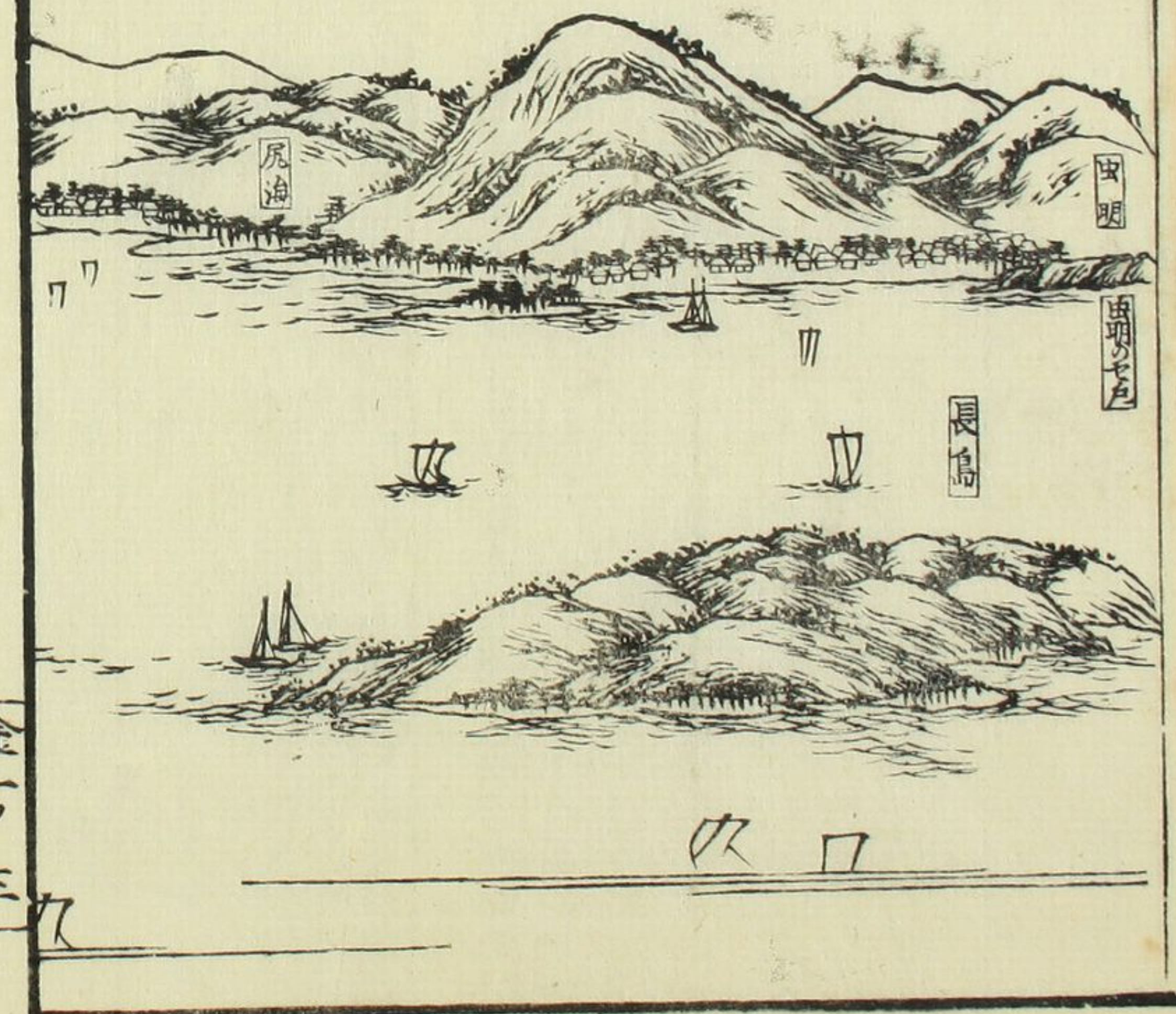
浪高し虫明の浦戸ふりておろそまをせし沖付は風  
船も虫の磯乃ねはたが長路より又をふら群  
影らぬ袖とさこの扱と内と藻すも出ぬせし



萬葉集  
 大船爾真提繫  
 貫水手出去之  
 與將源潮者于  
 去友  
 酒造くあうね  
 又とてよのわの  
 夫とてよのわの  
 舟出して  
 後柏系院



新千載集  
 風あつれ雲の  
 やのたふさ  
 友呼かひ  
 舟人の  
 舟人  
 後醍醐院  
 沖製  
 由明の進門  
 長嶋  
 尾海  
 扇島  
 半窓の  
 八幡宮



金一ノ三

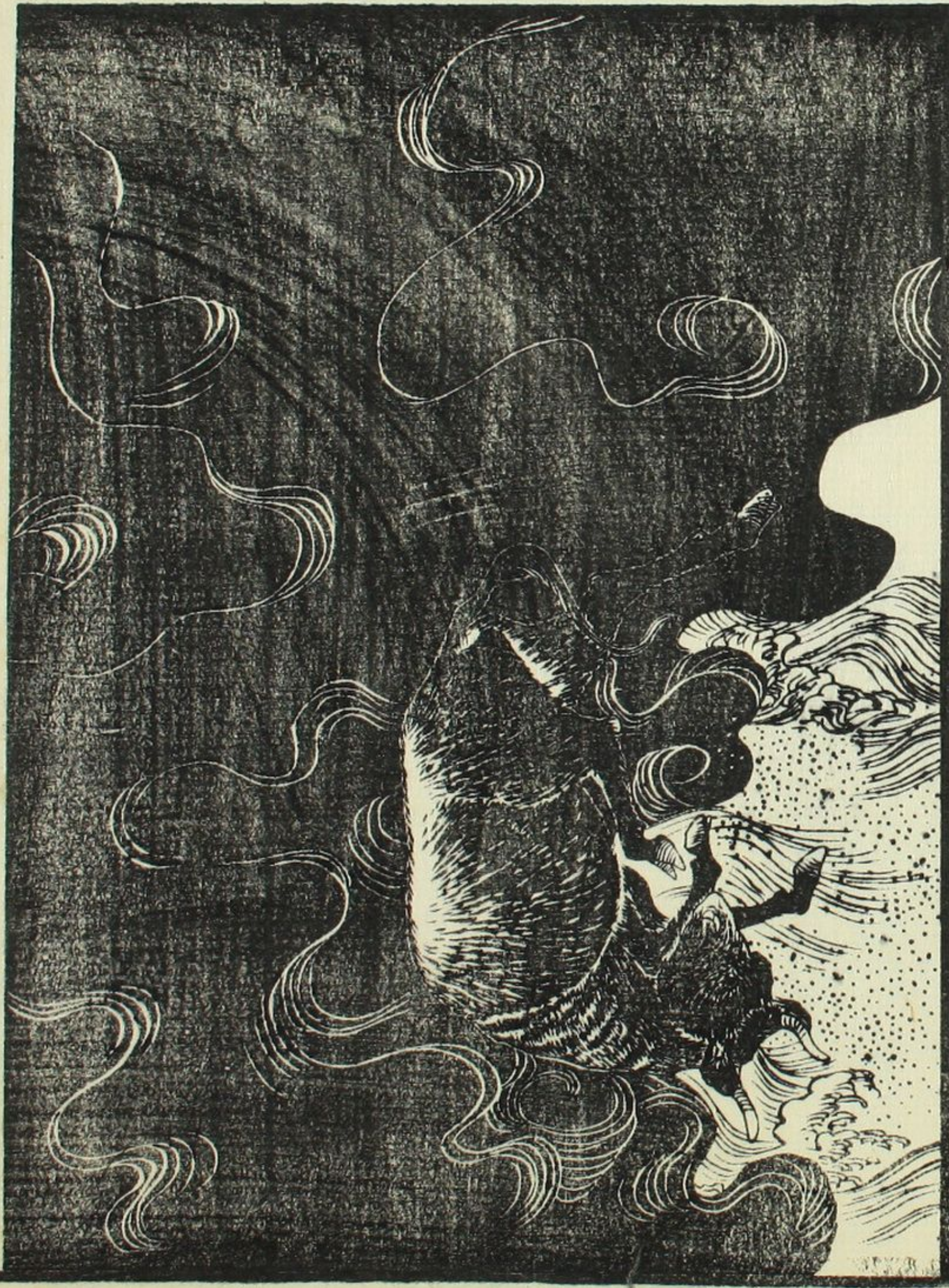














井上通女飯家日記云 廿九日の夜あけにんまは半窓しり

世と云ふは牛窓のゆれ漕舟船は止まらん 通女

名産鳥賊 當浦の沖あり他一超て遠く最も味い美なり

同指甲螺 同指甲螺一多 他一掃う 云指甲螺は獲しも長く長凡七八分計

前島 半窓の前より四葉ありて牛窓と一島をいふなり

小島 前島の西に並べて二島あり俗に前の小島といふ

犬島 牛窓の漆うらに里計の沖より相連すと二島あり一島は家此面

彼方より農業をまむ一島は巖石と横重なりて更に入住べ

地はゆるい山の絶頂に犬の形に似る巨巖あり此は犬石と号し明神と稱す

本島も石と建て是に祭る巖の太く圍凡五丈計なり夜は異なり里俗の曰

西國の足部は犬神と号せ者いづく人と恥と事多し是は小脳める者ありて来て

此石と拜されば多し退ると映とありて能く又畜しころ乃大  
其性何〜〜〜主是と号する時此島と連東て故て直し其性若  
あま〜〜〜山の半腹小社ありて住吉春日宮神木の三社を祭る  
則ち此を向は生まつべ

此石は往昔此地に彌師ありて其家畜しころの犬希代〜〜〜彌と獲る更  
雙りぬ籠籠とて夜も床を回りぬ〜〜〜に彌師死して後此山  
中小へ死〜〜〜

犬狗養畜傳

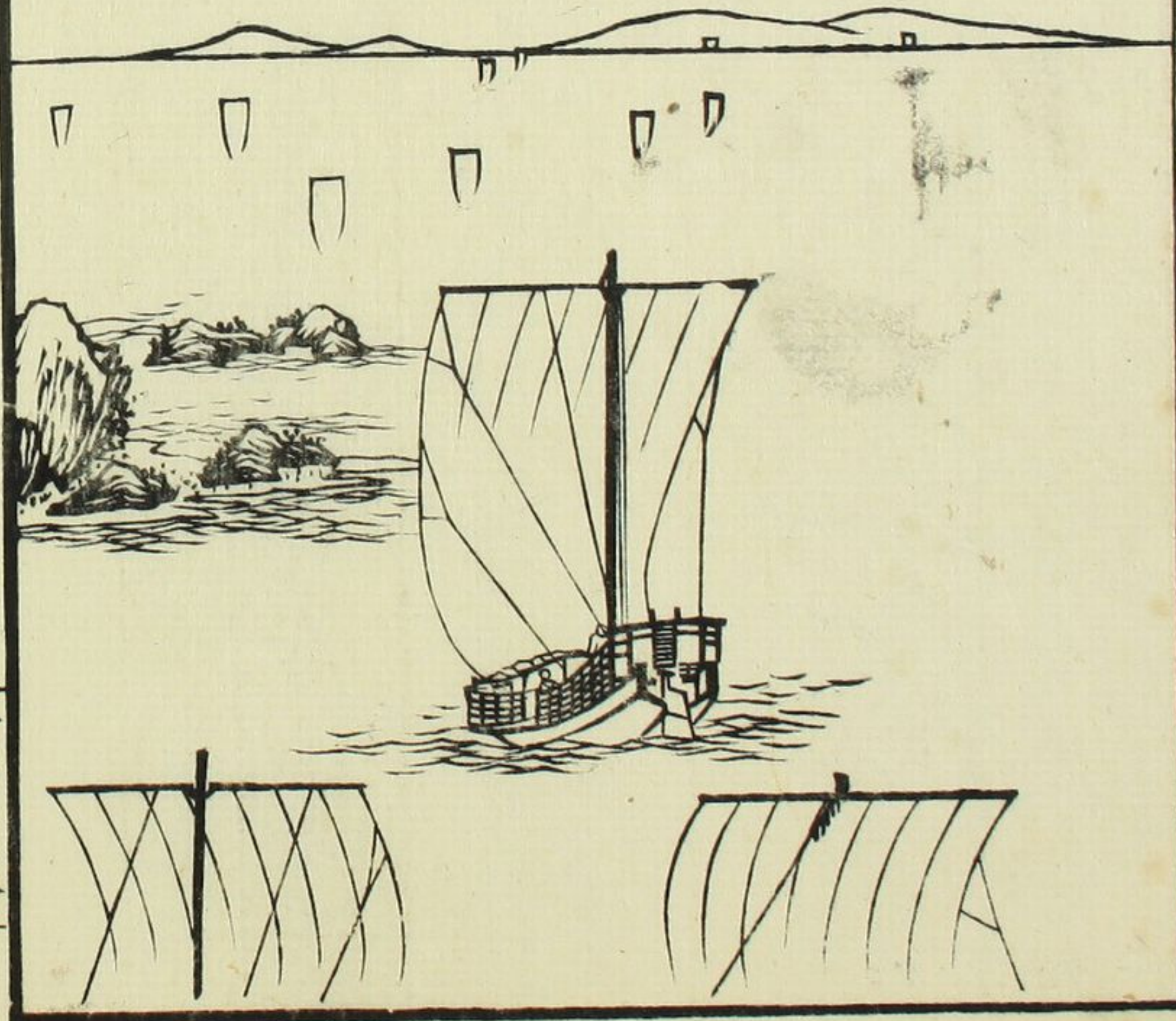
周禮六畜註獸可畜者六豕牛馬羊犬豕鶏とあり論語の古注も  
犬ハ守禦とて以て人ヲ養ふ〜〜〜又凡俗通曰俗説小物ハ實王と別て古  
守禦と故小四門不着て以て盜賊と避く〜〜〜續高僧傳ハ犬ハ防畜と  
云ひ撰嚴釋要鈔ハ物と名て守物と云ふこれハ兼好ハ徒然草ハ犬守ヲ防  
ハ物ハ人ヲ勝〜〜〜實ハ犬ハ慈恩と智ハ仇と剛ハ真利〜〜〜



犬鳴

大石山の絶頂にあり  
石の表裏陽しては犬の  
石の裏陰しては犬の  
傍に兎狗の形をせしむる  
母をよみてよにけり

腥と風しと  
保くくさん  
甘栗

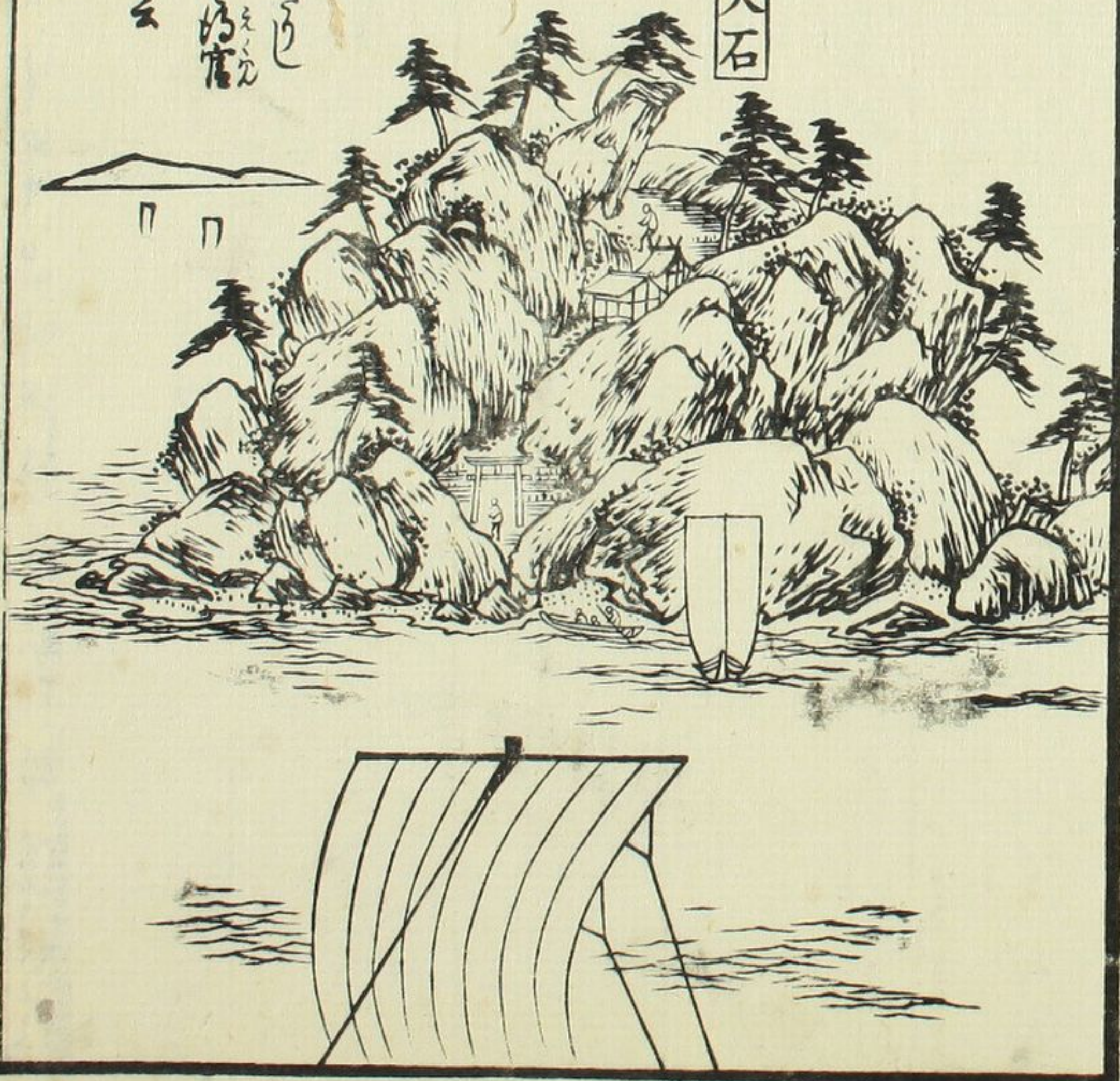


金一八

大島ヶ瀬

純友金ヶ瀬の嶽に  
楯籠り合戦の時  
純素汐通し有て  
合図とらつて兵船  
二十余艘漕來り此  
大嶋の瀬戸とて  
塞と録波を作て攻り  
行は純友督らつては  
軍をよみては走りし云

犬石





徳義に能く守りて心業の人と内への嚴く吐竊盗と防ぐ官家賤民畜  
ぶん有る者也且田犬狩獵の時山狩不致りて禽獸の所在をわすれ  
官家の禽獸を京末一切の邪魅妖術と根攘い避る故に道家の是と禁す  
とつ凡犬の忠切人の勝れ其獲る主の恩と初り是と被るは性なり  
和漢も不其例少くはる尚犬の養育有りては其業を以て

樞野

又柏野も 牛宮より一里北あり地漢より多く地を製

出崎

米崎小串胸上 此れ兎島の海あり 山田 地漢あり

田井

宇野 月那ともども海辺より此辺地漢あり

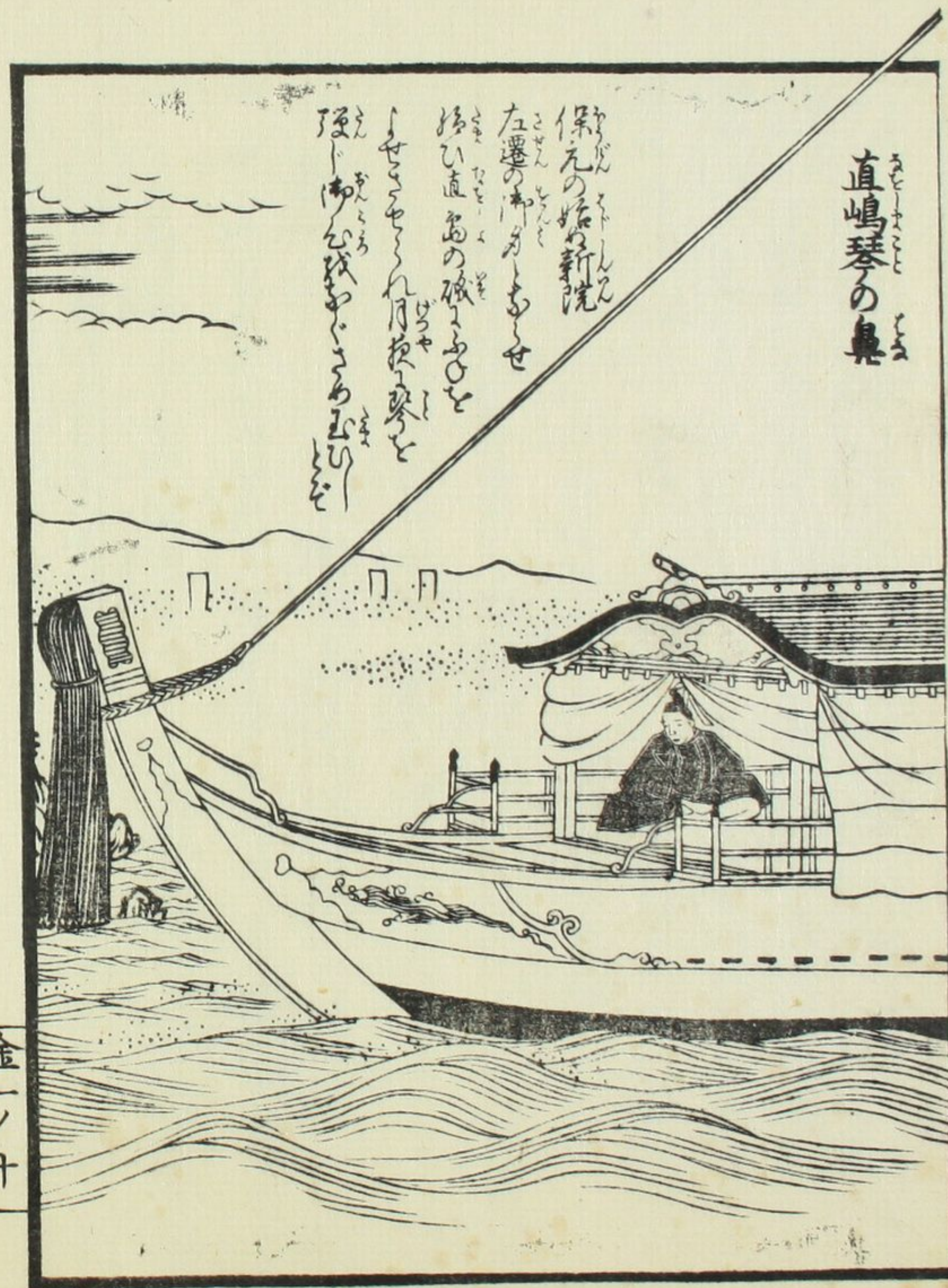
直嶋

田井の浦の南ありともれあり

保元物語を去新院八月十日新院下着の園より新清文到来此新院  
の所新清をのりて國司院直嶋より所御所より出されまはす  
後せまはす 白峯僧住子まはすはる新院院は國司直嶋

八輪嶋今の高松 着せ給ふ在廳木の何某嚴言して陸上奉る  
是亦依て據む直嶋御船とせされ此の浦に給所も其夜  
月ともりし寒也鄙人の心も都より月影のい憂ら  
御嘆け中も御心慰れ給ひ終夜御琴を彈給ひり今尚其音跡存  
せり其後松の津に着せ給ひ國司御所を造り出され  
在廳野大夫高遠を造りて松の宇の堂を今の寺と別此新院は  
之奉是に林田の雲井の御所松の今尚其跡あり其の地  
直島の嶺と云うすは新院あり御船とせされ終夜御所  
今あやすつて終夜の浦あり  
送の沖より恰も白帆とせ給ひり今尚其跡あり  
帆懸石 吾麻村の浦のいりあり  
重石 吾麻村の浦のいりあり巨巖あり重なるも人力の業あり  
日比の浦 兎島の出所より海より里針波あり





直嶋琴の鼻

保元の始新院  
 左遷の御方あまをせ  
 後ひ直島の破りあをせ  
 一せんせつし月夜琴を  
 ぼくし御心成りあまをせ



此地船がりの湯里して人々多量に遊んで建つて高き地  
 山家集ひの湯里して人々多量に遊んで建つて高き地  
 日比波川も方々して田圃の如く波らん

凡あーくくふとくふりき

推の途

新院配所在して佛の法世の清為と五郡の大乗経と御月筆に書寫しなむ  
 せめて筆跡の如くも都近き置か思ふに八幡山高野山若湯免阿ふ  
 鳥羽の安樂壽院の御墓に置奉りて由平治元年の春乃頃仁和寺の御室申  
 せむじり五の宮も関白の此由傳へ申せ給ふ殿下りもよれば  
 申せ玉も主上終清いれらして被御経と則て遣はる是後  
 御室も如此に御返事有れば新院大憤を給ひ我思心懺悔の為此経に書  
 置奉り所あり然るふ筆跡も都に置れらるの儀に至て方は

新院怒つて書  
 五郡の大乗経  
 推の途乃海を  
 沉れ給ふは  
 大燃くえけ  
 音もひけれ  
 とやひて納り





此經と魔道不同、我大魔王と成て天下を我領せん、淨誓ひ有て小指と喰  
せ給ひ五部の大衆、經の箇小龍宮城に納む、此給ひ此經の途の海に喰  
せ給ひ、此海に火燃發し童子出て舞をまじりて納り給ふ、  
此の浦より半里許西に河は流し、此河に林ありて地をさうり、此も石塔の波ありて  
波川  
浦田の濱 波川村の濱と云

波川の浦田に拾ふ蟹のよほ、  
接ひたると同れ、  
そなたらと浦田に拾ふ蟹のよほ、  
一説、此つゝ、  
愚按、  
今云、  
按云、  
西行

比總名也、今人香螺と以て豆布と曰、豆比通音、世俗婦人陰戸隠て貝と  
稱し、又轉じて豆比といふ亦然、リト云、  
又田螺和名太都比俗、太仁之上云、又甲贏、豆比訓、  
甲香光螺と訓、  
徒然草、  
又米あり、  
夫とる、  
啼も長、  
然れば海、  
香螺、  
益、  
国、  
貝、





西行法師浦田の浜にて昔より螺拾せり  
 又て奇しくもむしりゆひははるかに

引網濱

浦田より一里計西より引網村の海辺なり

大師堂

浜辺に小堂ありて弘法大師と安住の御本當兜嶋郡四国八十八ヶ所の靈跡  
 とて遍れとるりの多しと云ふ此堂も其二所あり

大師の清水

大師堂の傍より海から湧く清水の井水あると云ふ御湯の  
 引網村の山の半腹より當村の生土神とい

引網天神

天神の社のところよりあり其事跡詳しむべ

八房の梅

同ト傍に小堂あり弥陀佛と妻の土人の白く此堂は昔海中より網がかりて  
 上をのたまをばたけり村名も引網と云ふ又天神のそ傍にも云ふ事不詳

阿弥陀堂

引網の浦の長より此堂とて云ふ

楯場島

唐琴浦より引網浦より一里の凡十八丁計

唐琴浦

唐琴浦の唐琴浦

都までひた通る唐琴の波のすげで風ぞ吹く  
 素性

足しのね吹風乃かいては浪やゆらん唐琴浦

波の音はわたりて唐琴浦の波の音はわたりて

















金一ノ十七

道通院

佐川  
浦田濱  
松平  
松平  
色々  
あれや  
いその松  
花はほこ  
美乃  
〜〜

浦田

佐川







插場島

引細向ふ

引細天神

山の半腹小あり

青尻ねも

無り

八歩

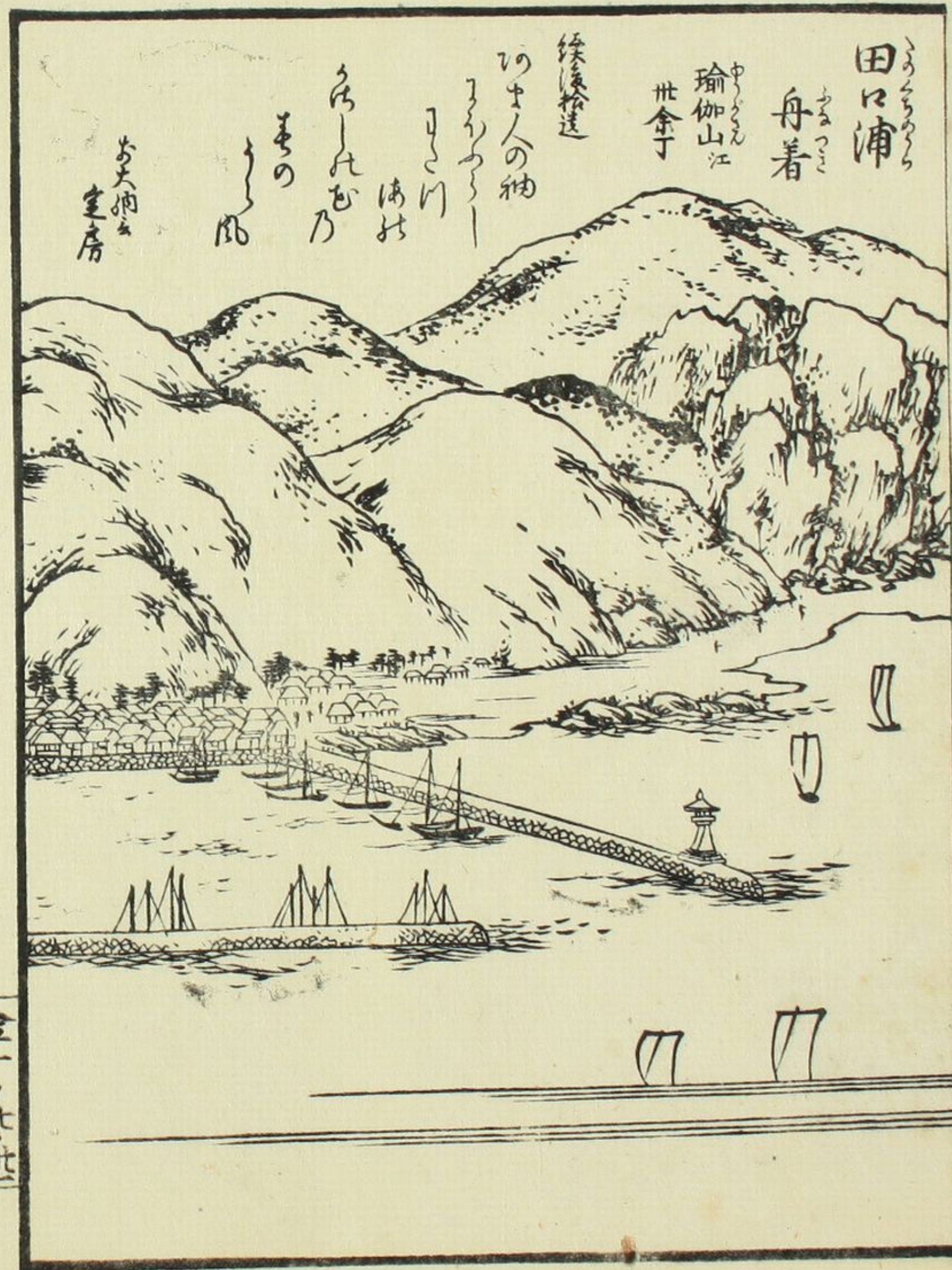
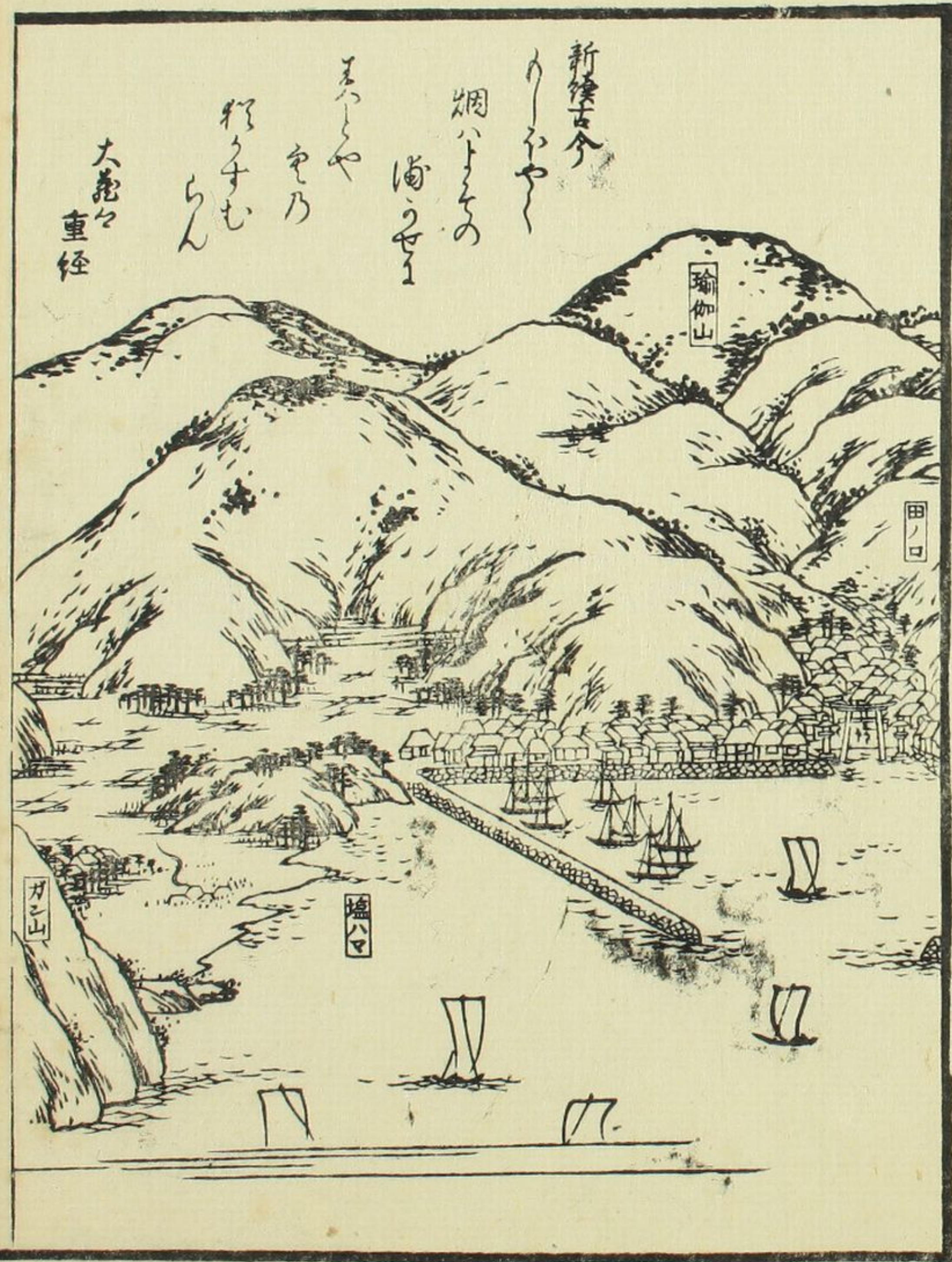


田口浦

兎嶋郡南濱の通船着居の傍の石に數十回の名跡とあり

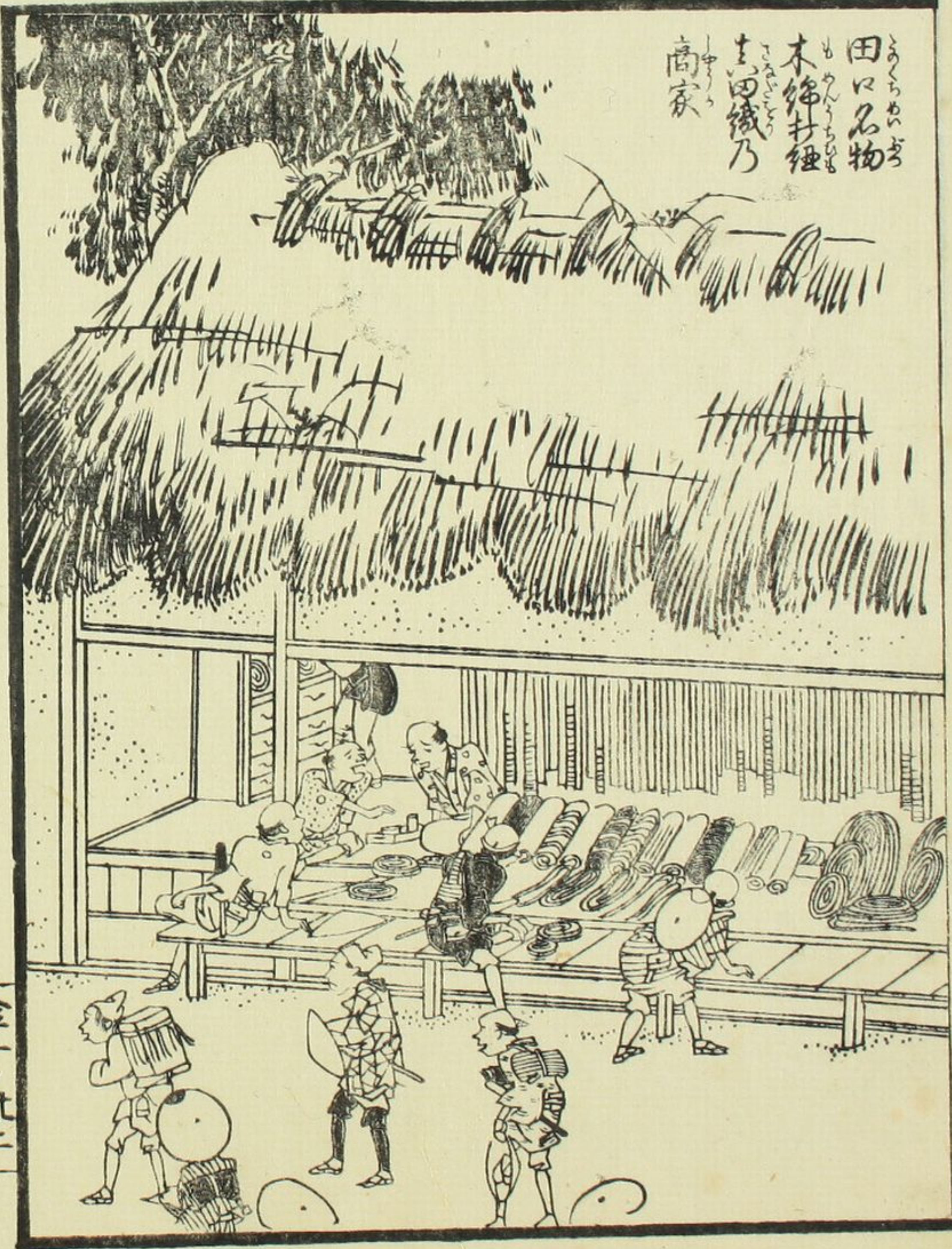
此浦中國西國往還の通船用波と浪と泊り且兎嶋の禁うる夜に  
糸指の諸人より着岸し且金毘羅参詣の旅客圓龜と渡る船場あり  
濱方小船宿建つて兎嶋山糸指の道條小岬地の名産とて左右の家  
毎小木綿糸の組紐打紐種此漆色とつくり太きつり細なり又ま  
田織二重夏帯袋織相掛上括ふるを糸糸と種と縞と区所せし  
中て糸並とそ様人進む尚小糸織の帯地と織出せり何れも青糸に  
しと家と在る様ふれ求む人多し故に至つてふとハハ船着あり  
是より兎嶋山小糸指の行程山路半余町所く町石あり  
下村の浦十八町後州丸龜渡る海上凡六里余乗合の船晚方より出  
帆と東雲の以下向地に着て借切船と登船と備せ其客の意小應に







田口名物  
木綿紗紐  
土田織乃  
商家



金一ノ元

### 下村の浦

田の浦より十八丁もくろ西あり其道傍塩漬屋

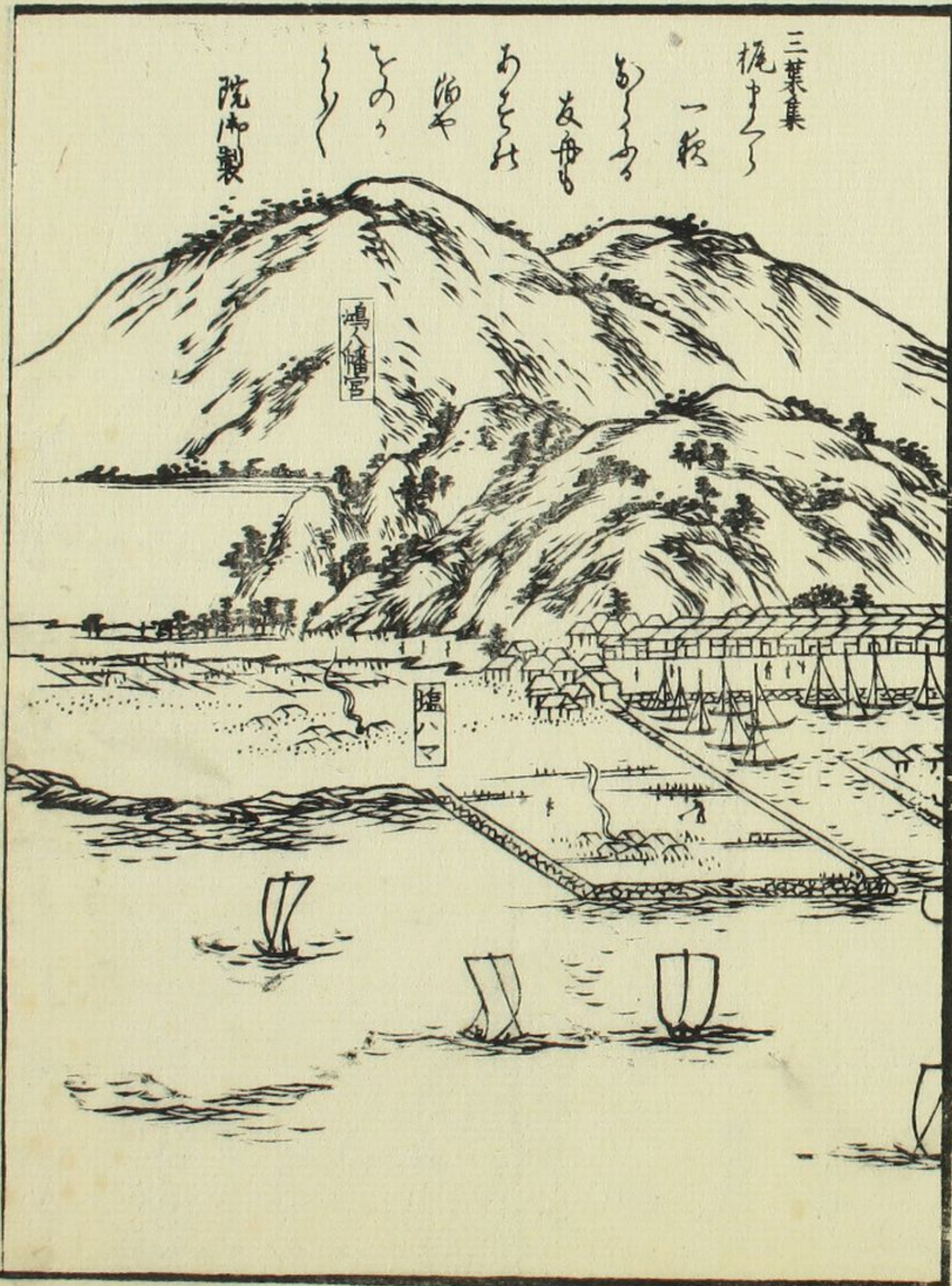
此地も田口小舟一々通船の便宜は浦一々むゆ伽山の繁ぶるゆふ  
糸織の稼客あつて着岸一登り登り行程此より二十餘丁  
あて田口にかりまうや何れも其便は珍小圓龜小波さく海上五里  
針通船夜毎小出帆とも塩漬と往來は金毘羅詣國通船の旅人其  
余商客あり農夫あり舟小舟船とあり朝小着あり何時もに同形  
かく至て後一は船とあり磯さかて塩漬して敷丁仕間塩屋の烟立昇る  
新着田口  
大村岡崎守尾備前等の浦を船と通るは向の方より雲一むす  
とあり其中一々鳴呼かややと叫ぶこの一々と怪しき思ひ  
程一船の上の岡崎とあり雲の中より足の小舟一々遠従の者あつて  
しるも一々と鳴呼かややと叫ぶこの一々と怪しき思ひ

### 鳩八幡宮

新着田口

大村岡崎守尾備前等の浦を船と通るは向の方より雲一むす  
とあり其中一々鳴呼かややと叫ぶこの一々と怪しき思ひ  
程一船の上の岡崎とあり雲の中より足の小舟一々遠従の者あつて  
しるも一々と鳴呼かややと叫ぶこの一々と怪しき思ひ

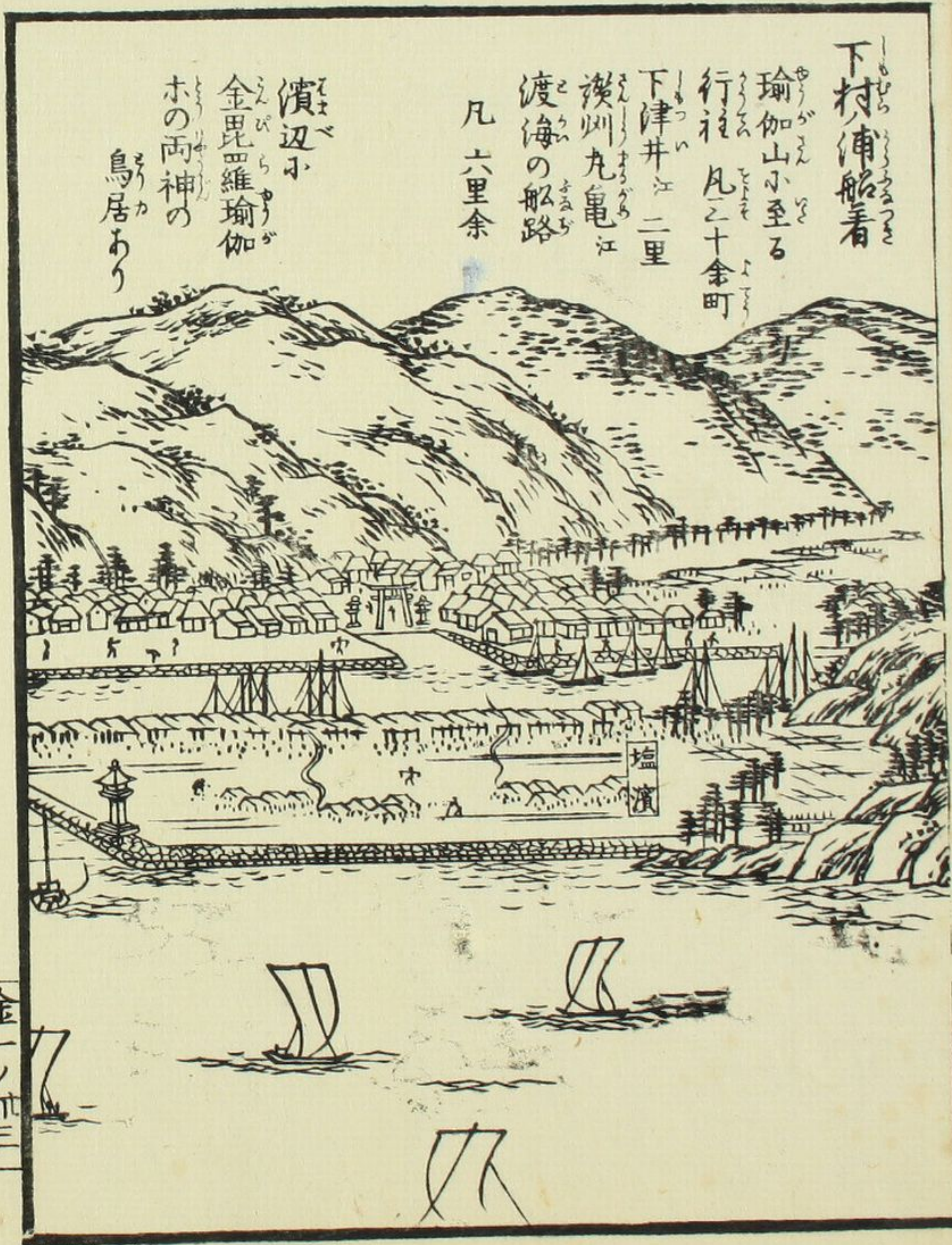




三葉集  
 梶  
 一松  
 友舟  
 あそび  
 海  
 磯  
 院中製

鳴門

塩



下村浦船着  
 瑜伽山小至る  
 行社 凡二十余町  
 下津井江 二里  
 淡州丸亀江  
 渡海の船路  
 凡六里余  
 濱辺小  
 金毘羅瑜伽  
 木の両神の  
 鳥居あり

塩濱

金一ノ亦三



さしは足輕二人船より出せば尋尋を給て行くと歴は者なり  
材本を母の怪貪放逸の者なり只今を便小行と外出と云ふ  
黒雲を連行しつと傾て夫女子ありとの縁い船小連来  
アて見せし是も其母とていして海に脱とていし解きり定  
文十年の夏あり世小大車とつりもの悪人と相とるつり  
のありとそも夫所為るるべしと吉とありい

児嶋

児嶋郡一圓の惣名あり當國十二郡の内とて海と隔て一嶋あり  
古事紀伊那那岐伊那那美二神生吉備児嶋亦名謂建日方別  
中畧 自古備児嶋至天兩屋島并六島委八關西名所圖會出

万葉集  
餘波抄

山家集

浪の上見ゆ小島は島がこれのあたりにあり別名を金村  
夕なれは風も波もより見ゆ小島は島がこれのあたりにあり  
備前國小島も島にいつたりなる河も物と漁行ハ  
各々我くもち長棹とて付て是後には甘棹のまじり

とびの棹と名付る中ノ年たれ海士人のまじり  
はつとて申さるる一岡はつとて候るはれて中ノ年  
あつとて申さるる

三初はつとて海乃初棹は中ノ年たれ海士人のまじり 西行

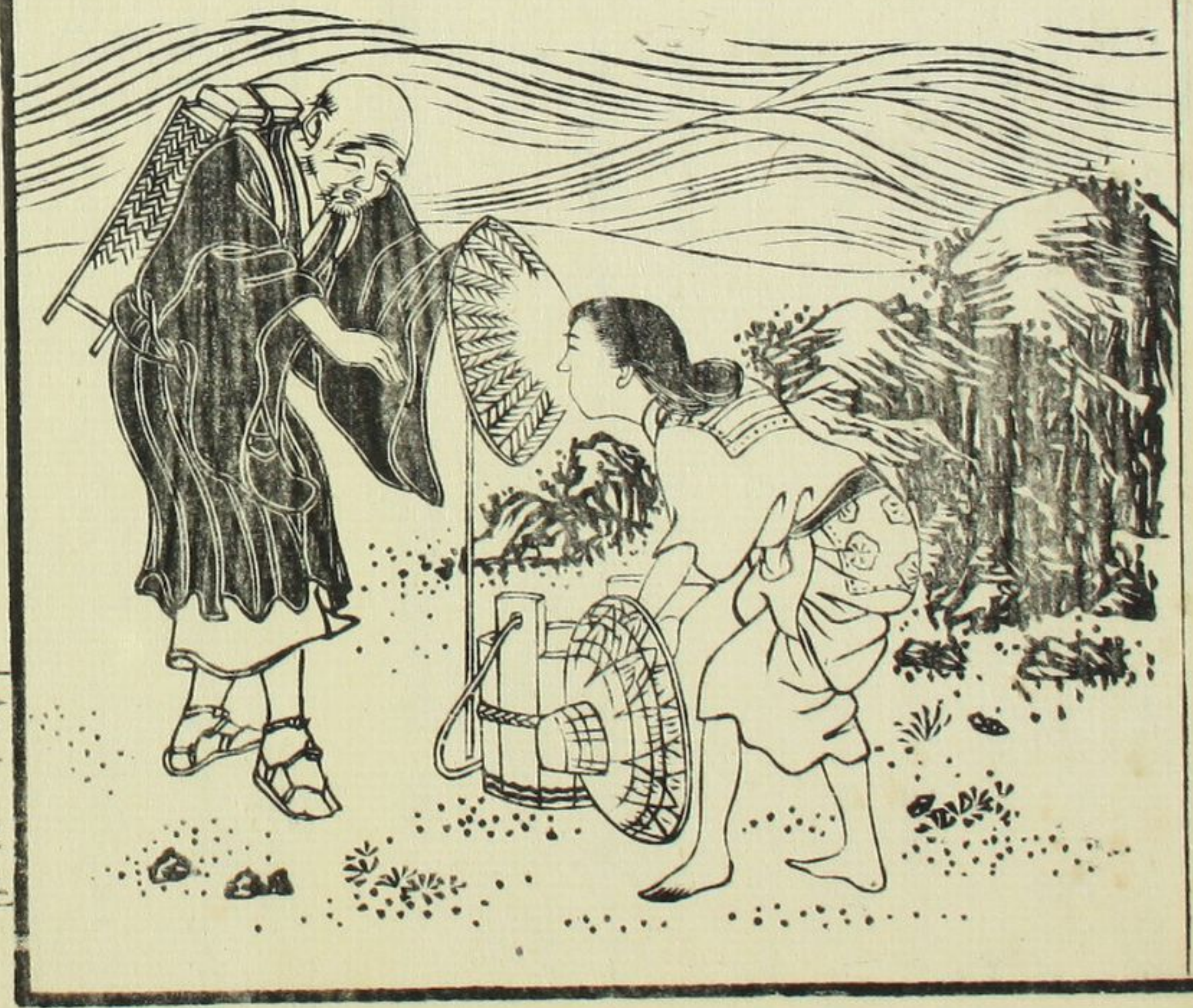
是當國の海上ノ糠蝦とつりもの多し生ざるは産之則ち醃製其味い  
至て美し他の所より酒客を賞説故に名産と糠蝦鹽辛と  
号し和名抄ニ海糠と云本草の糠蝦と云りの一物あり  
夏糠蝦ハ三夏より三秋に至つて出る其大なるりの四五分ニ過ハ色白くして  
微赤なり秋糠蝦ハ九月盛ん々出る其大と六七分色白く頭と尾と正紅  
此糠蝦ハ蝦の中にて至つて細きものにて而も蝦の苗より一種別として  
終ニ長なる夏は前山家集ニ云西行の奇とていし唯児嶋とていし  
何もの候も定るるは今ハ蜂漬とて浦とて身漁て塩辛製はとて此峰  
漬と云ハ児島の北濱とて南浦ハ方角遠いぬれど書の次手は作とて出



山崎  
申まうふらくらるものを  
あまひまると何ごぞし  
いいれば拾し捌ばと乾  
くゆるあらうしや  
けら後ありて

おれいくはかさ  
刺さく乾もとこと  
いいはらりいふい  
ももたらいあらう

西行



金一ノ五

瑜伽山蓮臺寺慈聖院

児嶋郡一ツの田は浦下村浦おのり。行程も小二十余り

本社瑜伽大権現

本地 阿彌陀如來 藥師如來

本殿小安置に共に行基菩薩の作りあり

幣殿 前本地佛二尊

右小月

末社 本地彌勒菩薩

同辨財天女

同二寶荒神

同四天王の傍に

本堂 本尊十二面觀世音菩薩

行基菩薩の作

願士三天

當山中興 増呼僧正の作

御影堂 弘法大師

本堂の右の方にあり 本尊大師乃自作

金堂

末再建綱

寶塔 本尊五智如來

御影堂の上の庭の地よりき係傳教大師の作

護摩堂 本尊不動明王 服士

於迦羅制子迦の兩童子に安られ 本社のりらるり

鐘樓

護摩堂の向より

繪馬堂

本社の向ふにあり 奉獻の名馬木馬おしさむむ 備後後山藤井某より獻る石馬二止の木馬り

蛭子石 大黒石

本堂のはらの岨あり

地藏堂

本堂のくらられり





二王門の御守  
御守の箱印の図

御守の箱印の図  
御守の箱印の図  
御守の箱印の図  
御守の箱印の図



瑜伽山蓮臺寺  
二王門登道下旅駕屋  
此辺の左右旅駕屋を建て  
てはては消へ泊支度と  
近し河も家達奇麗  
うり商売の店紙も  
依り赤紙帳といふむ  
神使白紙の圖の諸人  
つまもねりて  
いそいそと本  
佛のうらひも  
土田織る小倉  
の帯地もあふ  
家まへも  
と名存れ

金一ノ六六





奥院妙見祠 妙見塔の上より北に向昔は南に向うに神馬新く通舟橋の時  
龍王社 妙見塔のまわりの

經の尾 東の山の平腹のわたり行基菩薩大般若六百巻を  
鬼墳 經の尾の傍に鬼の骨と細草の埋りし所とせし瑜伽の鬼塚とせし所あり

方丈客殿の本社の坤の方より一湖水間二八仙間三孔雀間四大床間  
五柳間六群仙間何れも結構美麗あり林泉は自然の山岳よりして

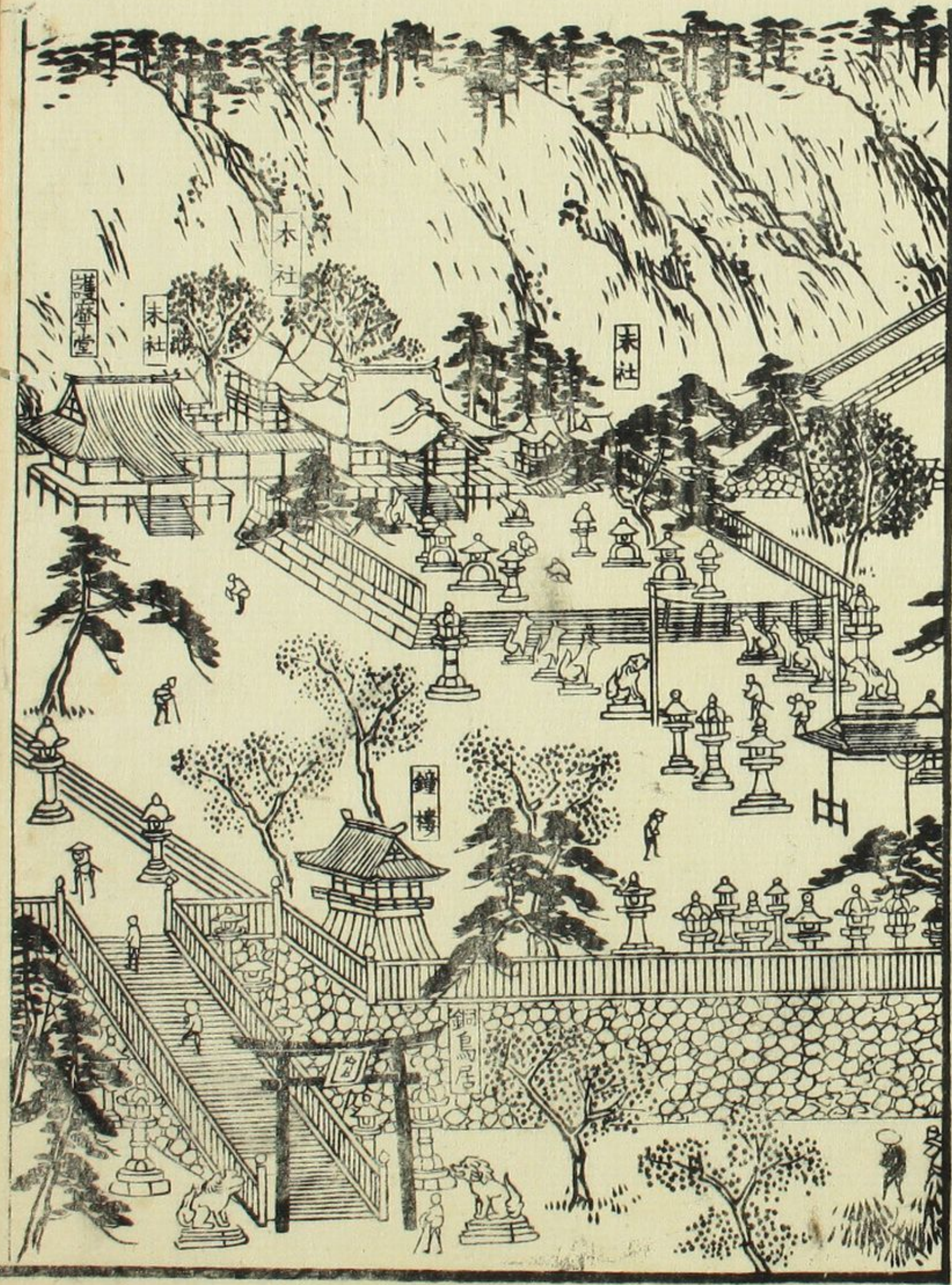
巨嶽祖ら樹木鬱茂して景色言語絶は  
持佛堂本尊愛深明王並不動明王石像の弘法大師 何れも増時僧正の作

黄金釈迦牟尼佛 長于五歩當山の南の深き湧出に於てあり  
地藏菩薩 阿弥陀如来 西尊も小恵心僧都の作皆とも持佛堂より安ん

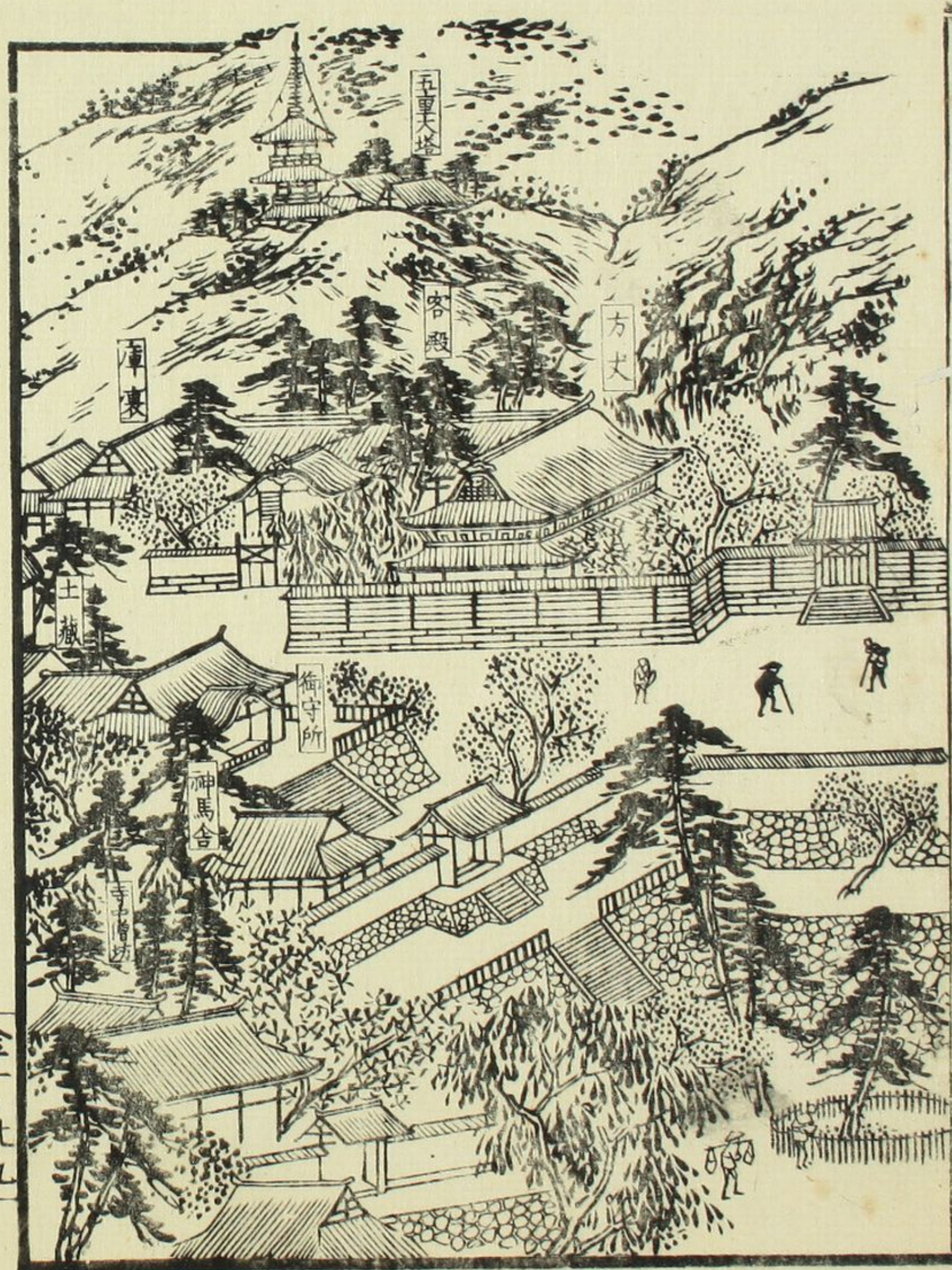
御守護贖所 本場の前より諸人 神馬堂 御守所の下より神馬二疋を懸て  
御礼とて受る

金一ノ元七









金一ノ元九

山門 執金剛神の二王と安行行基菩薩の作 銅鳥居 二王門より

茶堂 山門の傍より諸人よく憩ふ

乘藏院 寂勝院 山門の西あり 其餘寺役家奉て扱ふ

往昔木社の山上五重の大塔并堂舎是より本堂の後の方金

堂是より續て惠堂經藏番神社燈籠堂通夜堂大門お懸

て後奉廢して關る所あり故に近曾回觀し復せんまを催

其建營最中なり 神力靈驗の揚言も中く愚くして筆紙

乃乃所不のびる遠近の國より山川の勞つては暑寒此

時と嫌は歩も運ぶ夥し是より二王門登道の下より一

鳥居もて數町の間に右縁駕屋軒とあり其餘緒高家諸職店

も木綿の打紐類直田紐小倉織おんと鬻賣家も諸人必以土産を賣



當山縁起

柳當山ハ人皇四十五代聖武天皇の勅願依て行基菩薩の開基其始天平年中菩薩大僧正轉任して朝恩と報ト奉らんが爲天下泰平の御祈願と修とて一字と建せんとして自ら遍く雲水遊歴して福有縁の境地と撰ひ給ひつ 竟一兜嶋小渡り来て此山村の茅屋に宿り給ひる夜は夢に神人來りて告て宜く我ハ神世の昔此山中の主なる産授知命之僧正此及王法守護の靈場と造せんとの大願と起し給ふ志殊勝なる我任む六無雙の清増され早く来て林境と開とて密瑜伽行と修し給ふ國家安全頼いふも又我と即ち瑜伽大権現と稱して齋祭を給ふに長久に密擁護の善神ありて利益と施人努る給ひ給ふ事ありて宜く見打され此寺此曉鐘遠く聞て月頃る曙うらる僧正信心肝銘し

やがて山々小分へて此方彼方々尋ひ給ふ此山の辺り殊更無垢清淨此靈地と見て山高くと二匹の白雲峰と遮り谷深くと萬仞の青巖苔滑らるる空元々々々傑出せる山勢竜の臥る如く虎の跳るに似て奇木鬱々として枝と交(靈草芬々として花を開く月出て無明の闇と照し雨濺で煩悩を滅し岩もる清水冷く流出て五塵の垢と洗ふく松吹風長く響きて六欲の夢と破るく羊腸を徑路を経て人家と隔るく二十余町南北に更小海に連るる萬里一望水天一色の景色誠小有るは所ありれば神統地いかに思ふ合て大般若經に旨軸と書寫して是と埋り其所を經之尾と名つけ一寺と造立して即ち經尾山瑜伽寺摩尼珠院と号し彼神の教れ如く瑜伽大権現の御社と建て有來瑜伽相應して慈悲此二徳を以て其睡る阿弥陀藥師の二体此本地佛と自ら彫作て安置奉



佛法王法の寺神崇之向之密瑜伽の行業を修し國土女徳の新徳を  
急ぎ給ふる時此山の西の方小夜多し怪しき光りたゞと御覽ト  
給いつるも故もとて見行のく一株の香木ありは是とて伐て又もつら  
ら十二面の觀世音菩薩の尊像を彫刻し本尊とて作らるる即ち今來  
尊是より斯る尊の精舎もれも延曆廿頃より阿黑羅王と号する夫婦  
二兒の悪鬼何方もあつて來りて寺内の僧俗を追出し近里の人民を傷害  
するを教を志す人々大に恐怖して種々防ぎられも精舎の自在の變化な  
りれば如何も爲すやと京都へ新へて帝聞あり驚き給ひ急ぎ  
誅伐せらるる以上田村磨と將軍とて許きの官軍とてむけ給ひ田村  
磨此嶋へ渡り來つて力と尽して攻給ひ霧と翽霞消る妖怪  
もれ輒く討取給ふまう難く大に悩給ひて瑜伽大権現に奉幣

して丹城と袖で宣ふ杖う度悪鬼退治の勅令と奉り送小此嶋は上向  
しくも元來不測の怪物とて人々敵とておのりて甚き清浄の神  
窟に於る妖魔は任んず其具神威のからぬ似る作と頼く此二つの靈験  
顯て我威力を如くと懇祈願と凝給ひるに靈験あら現れて彼妖怪  
かみの中小鬼心翻して將軍小隨い奉り攻む謀とありて一奉り  
田村磨大悦び給ひやと彼鬼兒も素内にて數十の軍兵とすれ直來  
誅戮給ふ時彼阿黑羅王も幼神威權れて心の如く働け得ば自ら首を  
失ひらるる此度勝利する竟鬼兒が心改り軍と導りて故られと此  
嶋と兒島とを討つるも其鬼も人々怨みんとて美女と童小  
兒と紅粉と粧いりて所々に往來し兒が地を縫着かといふも今も  
了斯て田村將軍の神靈の験ありと生靈の餘り荒果る堂塔悉く修理



如給諸又彼鬼に運歌歌とらびりあ後親と殺しの罪と思すや自ら  
苦みせり由村將軍志く是とられ給ひ集おの支青と申小運給ふ  
世小瑜伽の鬼墳と是あり其後不思彼らなる彼鬼靈十五の白狐と現  
して殘善靈毒の心と翻一大権現の使結もつて佛法守護の善神なる  
衆生の患難を免きし其後源平の挑戦の初より兵乱つたに私建威の  
大乱より世は釋謚の期もつて諸寺諸社を類廢せし頃當山も殆衰微  
小及んせり人皇百十代後小松院御在位の頃増叶僧正と尊以大徳お  
しる當寺に授任給ひて威をんす法燈と挑起絶ふんを法脈と継給  
ひふ来り連綿と相續して今に至り又中々天和年中故有古来より乃  
辨と改ら瑜伽蓮臺寺慈聖院との瑜伽と則ち慈恵相應の徳と以て名  
づけ蓮臺と妙法の蓮臺とあり慈聖と彼行基菩薩の手づかき

給くる大慈聖像の御座と肝とら意あり其餘龍王社辰巳乃  
方に鎮給ひ妙見宮丑寅の方遙く高山の嶺よりゆる護摩  
堂御影堂持佛堂寶寶塔二王門未社の垂跡のゆるりて悉く  
由緒あきもあれと畧し其大概と記しよらん  
靈佛靈寶御震翰の類諸家御寄附物和漢の及書畫珠器物亦数  
有とら支敷くし記し實能に畧之  
靈方拜見 例年御祭禮 正月廿三日 二月廿三日 九月廿三日 亦あり何れも  
御修法執行あり 泰禱群集 二月初午日 稻荷社の祭禮あり  
一鳥居 田の口よりめが町の入口  
二鳥居 河の中間あり大門再建の地八則  
此鳥居の上の方有人の上りり  
兒が池 一の鳥居の東の方より  
化粧坂 化粧の變化せし所といふ一の鳥居より三丁計とあり



石川善左衛門成平

藏堂の左有

石高凡五尺方一尺七寸計  
臺高一尺方三尺計

石川氏依りて度々治りて表歴  
寛文の年間懸史亦所せり當国見嶋  
郡に來りて教五穀豊饒の方策しめ  
ら上忠節とて下小に慮と絶  
萬代水旱の愁いと絶くそ一依て其  
高恩の有がこれと後世亦傳へ當志  
却せざらんが爲に郡中より百六十年  
の後文仁二年其のりて  
石川鶴と此山と  
達る所あり石  
後たはれ小あり  
かへりて廿争洋たたひ



金一ノ四十三

石碑銘曰

ゆゑのゆゑ古備のては六千早振神代三柱の御神八の剛とて人給ひり其のり  
志ろはれと迎せ世もれ豊とて新玉の年毎に森早に田畠とてそりい  
り今より百余年余二十年前昔も穀実のり鳴人最芳ねたふ不兼應二年四  
月より苗さす早つて七月中れ公の目ありて俄く空かた曇雨とてりり  
降足果の山より水四方よりあきて補たの家と流し玉峰の道と崩し水  
おぼろしく人々をさへりり斯く首の君とて大人と八月望の日此島に  
下し給ひ医師とて治りしと飢人の春いさるの夜とあり水に於て民を助け  
給ひられ鳴人も志げれ御恩と筑波山の新とてりあさるるかて因りて  
ア志りて申す行あく其年春ぬて玉くしけ舟の作と兼て正月  
の七の月同所下末にそる田畠崩き道とてけらるせり此時而に  
地より旱のぬいと除むとてら青人草成かり出りてあり金の土とてり  
る七角障経歳とてりくくそあるは横ありあせる山とてりあさるる後  
江村林村の上りてとてりり松林湖とてり夫より木見村の上りて森池  
田村掛田村小川とてり柳池下村小曲池田村とて集池長尾村小天王池とてり

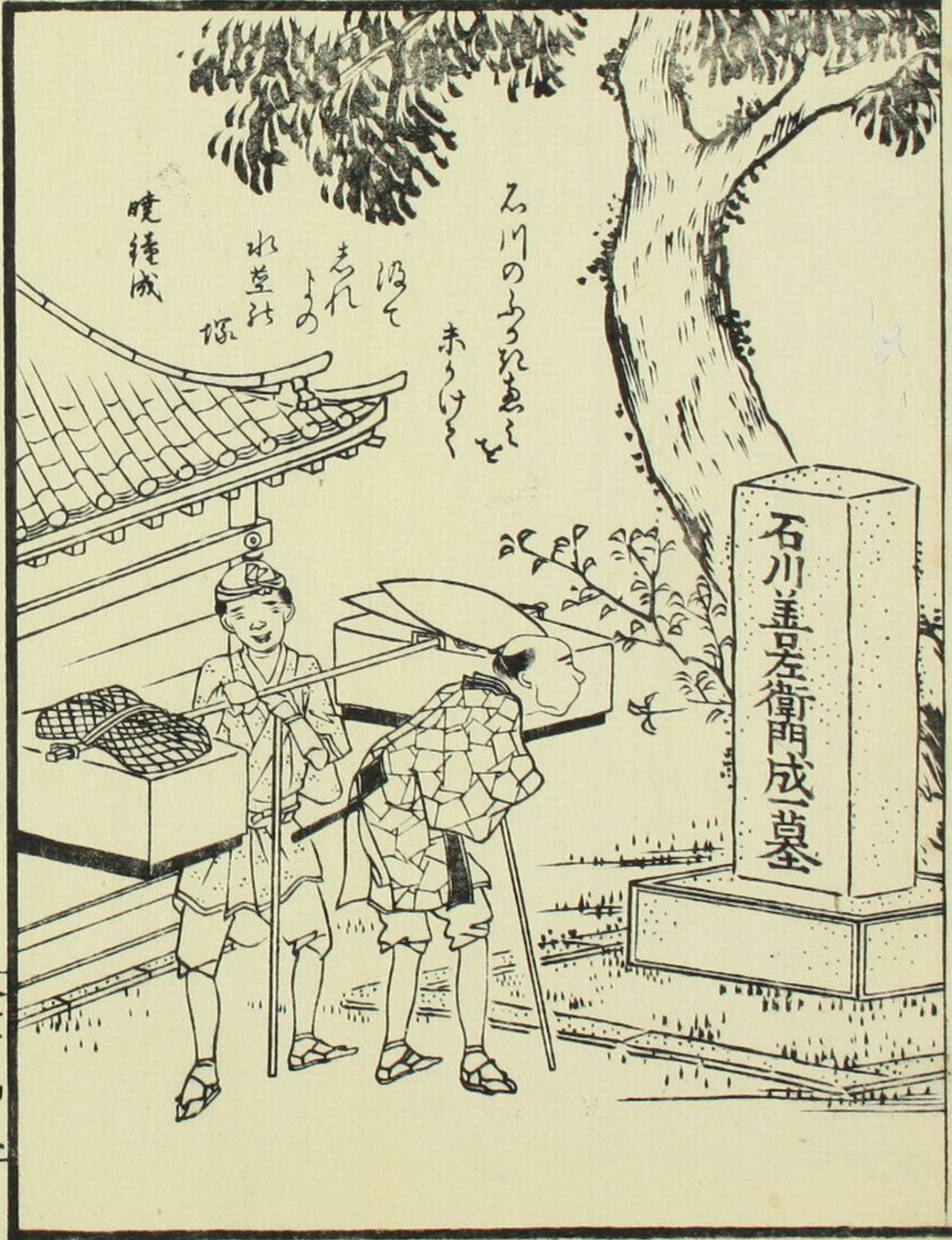


とぞ作りて... 池... 水... 雨... 寛文八年... 八月... 雨... 池... 水... 天... 田... 寛文五年正月

末のころの日... 寛文九年十月... 病... 終... 同... 年... 月... 朔... 日... 日... 寛文五年正月

臺の左の脇 當郡中上野八良平保満 三宅四郎廣隱 中嶋三良四郎宣光 三宅安太郎弘道 今田五右衛門信幸





金一ノ四十五

小川橋本味野赤崎 下村より下津井へさる間の漢をうり塩漬多かりし  
釜島城趾 下津井の東久須美の端のむら沖あり

天慶三年前伊豫掾純友残黨とあり此地小城廓と稱し捕籠る播磨小島  
田惟幹備前千高兩勢都合三千余騎して攻寄るし下も賊徒大勢して敵  
かく大敗れ故に播磨備前兩國いりも更らう安藝周防より南海四国の勢皆  
純友が手小属し其勢強太なりしとぞ  
同三年純友退治のちまた備前依藤原倫實と大将して五畿内の執西千余騎純伊  
汝路の勢千五百余騎し西國小左向る官軍数々攻戦ありしも城あつて勝  
利を得終に官軍討負て後彼の園小引退くし其後純友は九国二島を威し  
るい勢い盛んらびりしも天慶四年六月終に官軍のちには滅亡せり

前太平記卷第七

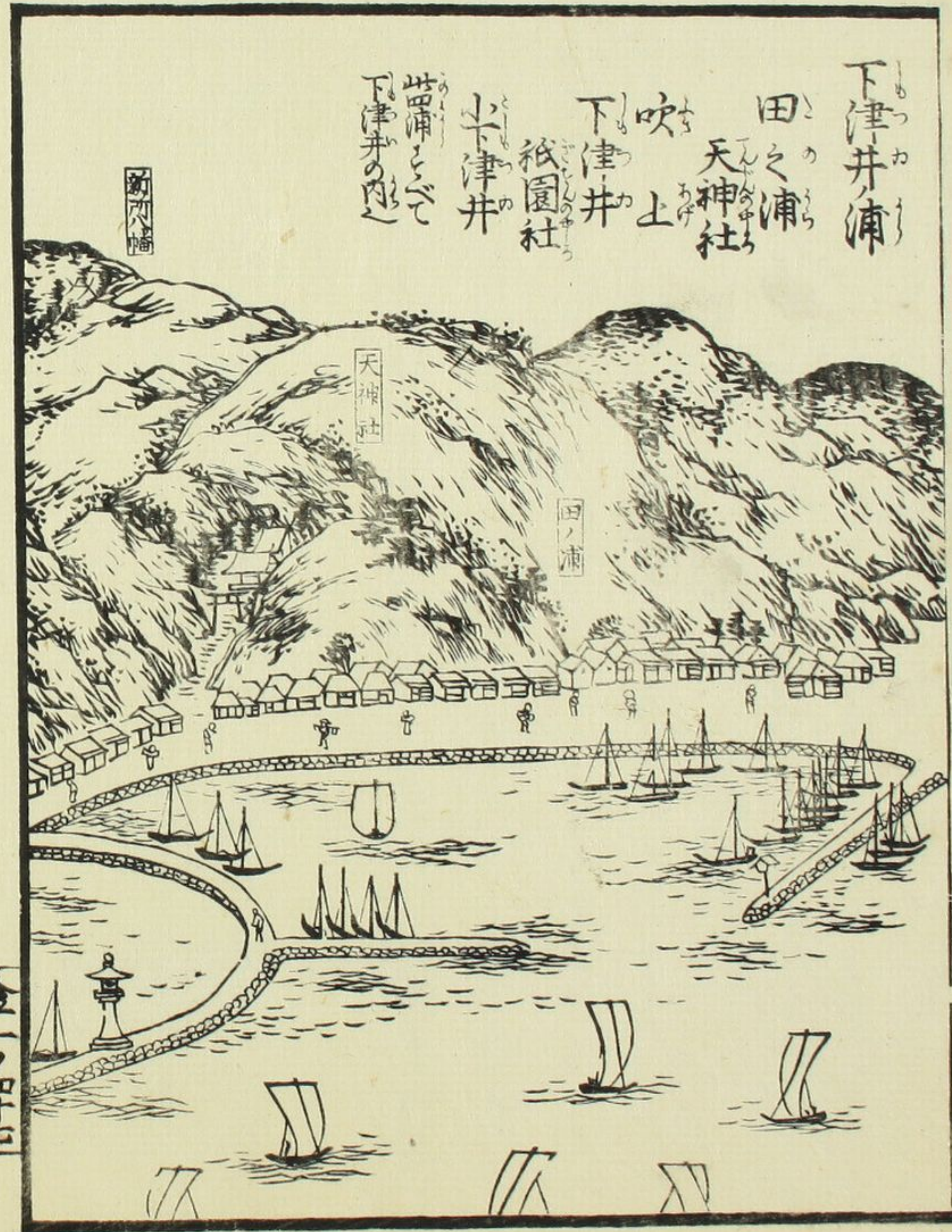
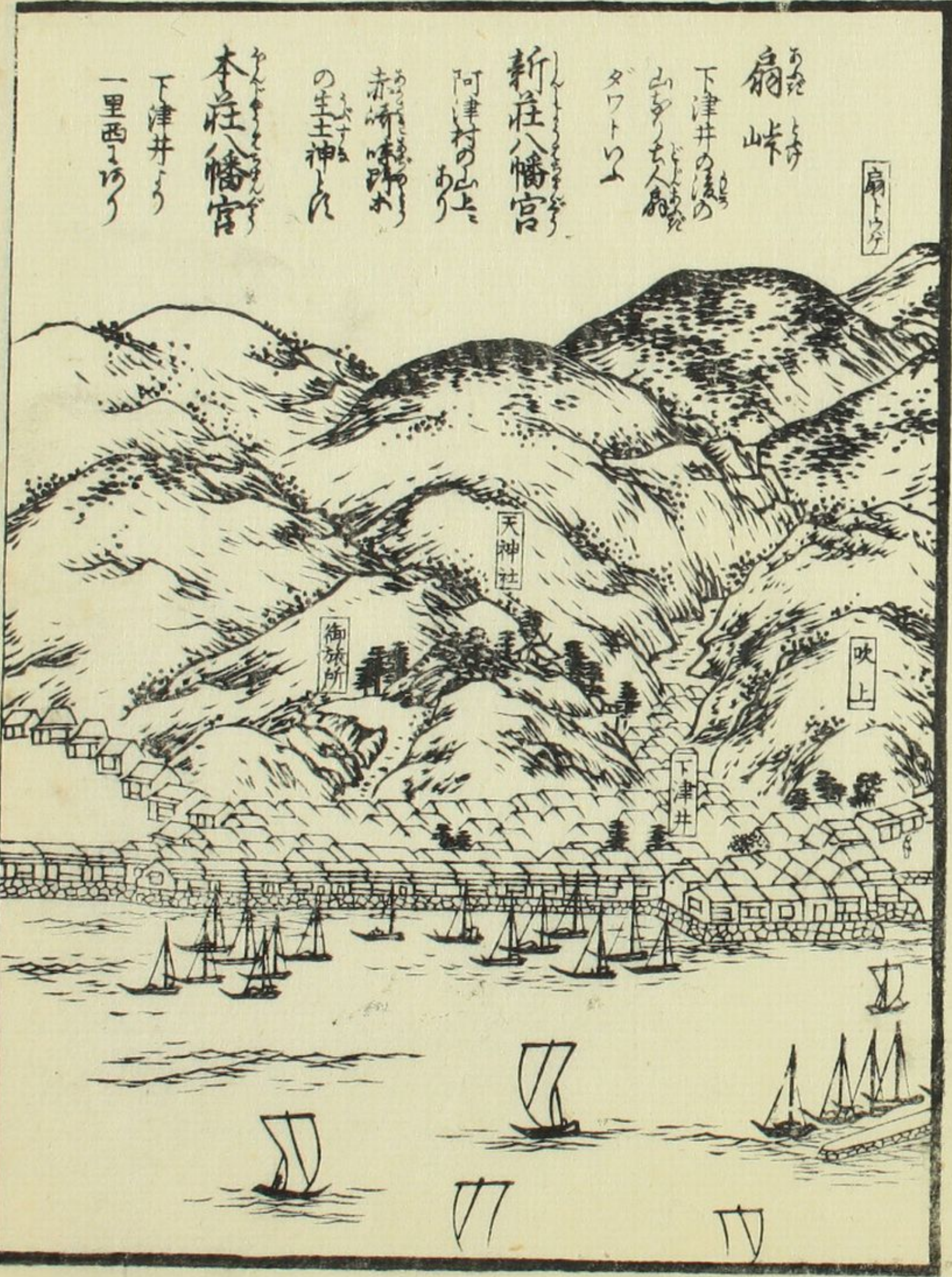
去程純友が討手して山陽道向らき一た備前依藤原倫實は千余騎を  
引率し二月十二日に都とて二百余艘の兵船とて同十九日の辰に



備前國釜ヶ嶋に推寄敵の陣を見渡せ東の洲寄の海の面南北十町計り  
 笠戸名を以て岸内をさぐる如く切岸を疊んで其上岸を塗るに重に  
 高槽をかた北の方海の中を乱抗と茂く打て遠浅の馬と立させトト  
 梅へく南の磯に兵船三百艘はらるる横矢を射んと支へく城中の南圃  
 の武士集りて見えて白旗赤旗根村濃福妻裾濃月皇水小波流  
 帆掛船月結輪遠い村十鳥雲一翔る潮小映ト勢の言少知らるるも色  
 の紋盡るる緋五百流も切岸を翻翻して錦と洗ふわくわく寄手先  
 紀伊太路の中より水練の達者五十人勝つて各物具脱とて海中を  
 潰り数本本々る乱抗一本も残らば捨て早雄の兵船十艘廿艘  
 づ漕寄く遠浅の馬と追下りひひひ打来て撥楯の際槽の下小打  
 寄て唯一掃りと挑み今小城中小鳴とあづりて横矢を矢の差別をく

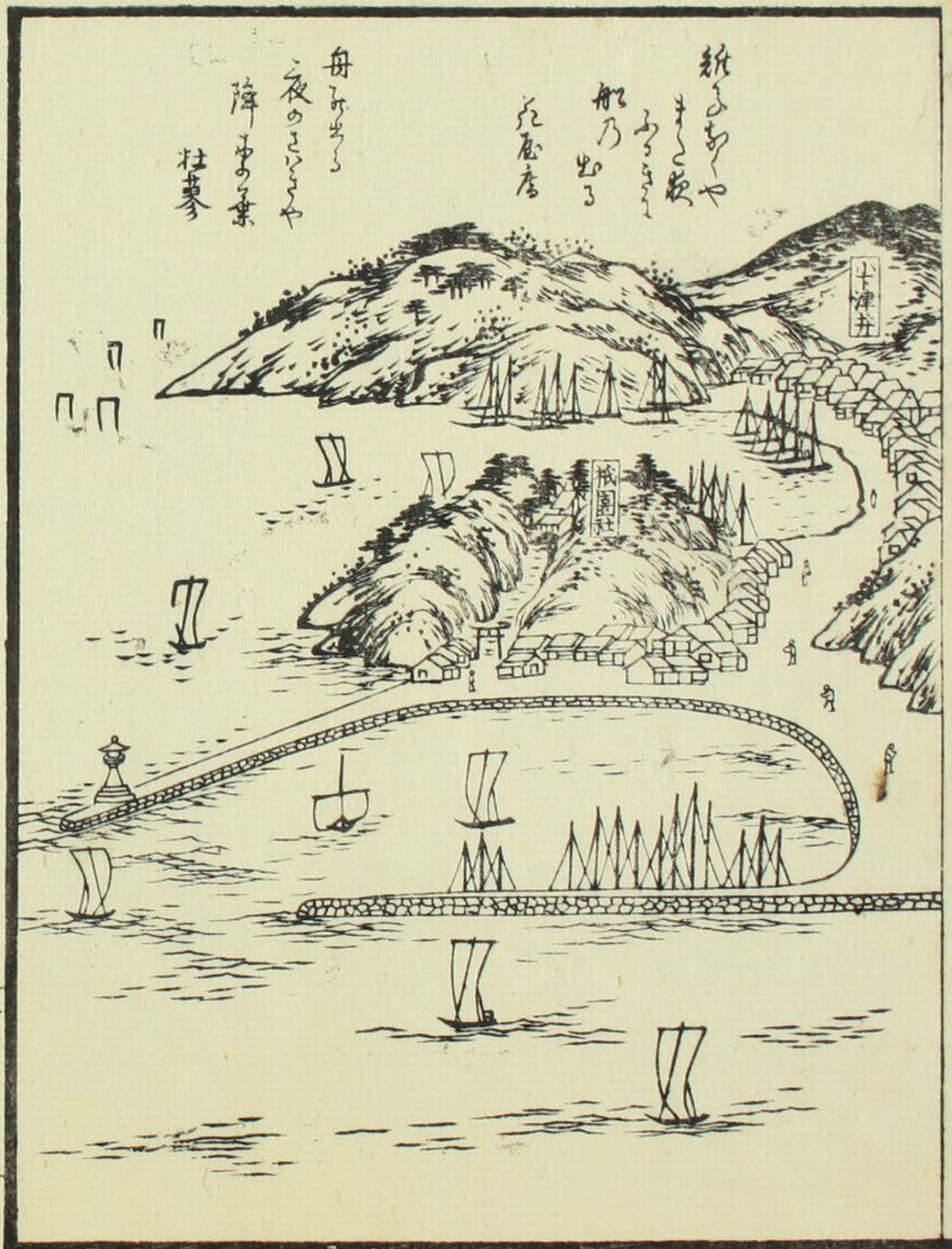
散々射り中署  
 此城唯今落し見たり推亮純素泊通小居りる時の声  
 失喚の音波おひひれ山々各て駭く聞れ去る軍始りて相圖の時  
 節今あづりて其手の兵船二十余艘掃り掃て漕来り大鳴の瀬を  
 指塞して鯨波を作らけ渡りて攻められ純友が勢力を得色で  
 直して戦ひる官軍も後に敵を受け進退自在あづりられ終つて戦  
 い負て藤々の渡りて廻つて讃岐路を引りてさるる  
 田之浦 下津井の内より東の渡り舟着る彼方の構りり  
 吹上津浦 田の浦に西津浦も下津井の内より着船の渡りる  
 正慶元年三月後醍醐帝御謀叛より讃岐の國に流されし給ふ時妙法院を燈  
 法親王の讃岐の國に流されし給ふ藤原の國より渡地を修て兒嶋の吹上り船  
 によりて讃岐の陸間よりせ渡りて





五十四





金一ノ四十八

下津井浦

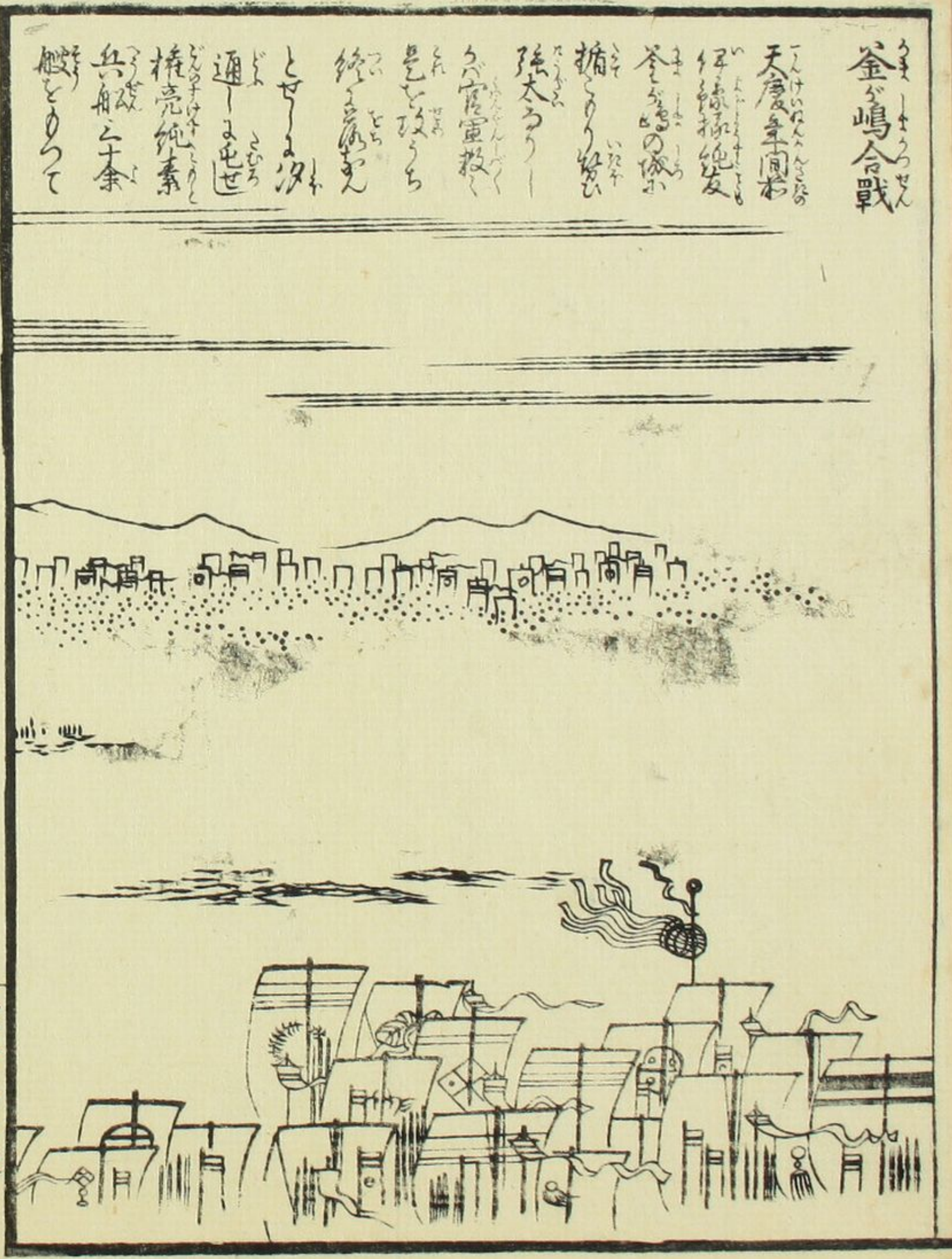
下津井浦 下村より二里許西にあり児嶋郡西の端なり 小下津井 下津井の西にあり  
 押出浦南海道通船の候りて故小朝暮渡海の客船もさへ余昆羅  
 泰詣四國通禮出家武士諸商客都鄙の老若打混ト向ふ渡るは此方  
 着けりむ向路續州四龜の府より海上を行斐凡五里沖に塩飽七島は  
 島山此彼不測なり向ふ嶺の山々見ゆりて風系言ふる色  
 且中国西國上下の諸船の泊りて順風と待りて高家小文身見たり  
 積り揚あり其上の浦吹上村小下津井小砂にて下津井の小名にて四  
 浦も小一圓の湊も入家も建連て西に祇園の社町内小天神は  
 聖廟寺院草庵山中小つて蟹昌も児島郡南濱の第一といふ  
 府峠 下津井の後の山に赤崎と下津井と出る小此越る所の時より土入是と由輪  
 世上の茶亭ありて南海と眺むる風景千望の浦も想はれり



漕せ  
 是援候  
 小官軍勝利  
 後州の敗色  
 此は通し  
 の海より



釜鳴合戦  
 天慶年間  
 伊藤孫次郎  
 等々  
 強太  
 久官軍  
 是は攻  
 通し  
 橋亮純素  
 兵船二十余  
 艘とありて



金一ノ四九



名産躰

下津井の浦とてまゝ漁獲諸所より出ることも此れ出るの味は美なりとぞ

大島

下津井の西浦呼松村のむらゆの沖より

夫木集

大島やちの塩あいに舟の棹をうねるもとる 志慶

大島洋

折中同

真那辺

下津井の西南より

山集

まゝあつちの塩あいに舟の棹をうねるもとる 志慶

まゝあつちの塩あいに舟の棹をうねるもとる 志慶

塩飽七島

下津井の向左右の澳より

本嶋

塩飽島の木島より泊浦宮濱新家甲生笠島浦屋釜大浦福田浦尻濱

向笠嶋 雀小嶋 辨天島 長島 馬小嶋

廣島

本島の西より江浦立石浦青木浦市井浦茂浦廻り九三里余より

おてはきの浦里はまゝ

と乃業とする女は

も男もさういいて船のり

ても小もさういいて船のり

色ももさういいて船のり

のて改らうてはまゝ

懐かひたてて市もさういいて

りらあつちの塩あいに舟の棹をうねるもとる

異さの長列はくも難難のり

づもりらあつちの塩あいに舟の棹をうねるもとる

要とあつちの塩あいに舟の棹をうねるもとる

食一起居をふりしつゝ鳴呼

あつちの塩あいに舟の棹をうねるもとる

ふもりらあつちの塩あいに舟の棹をうねるもとる

ふもりらあつちの塩あいに舟の棹をうねるもとる

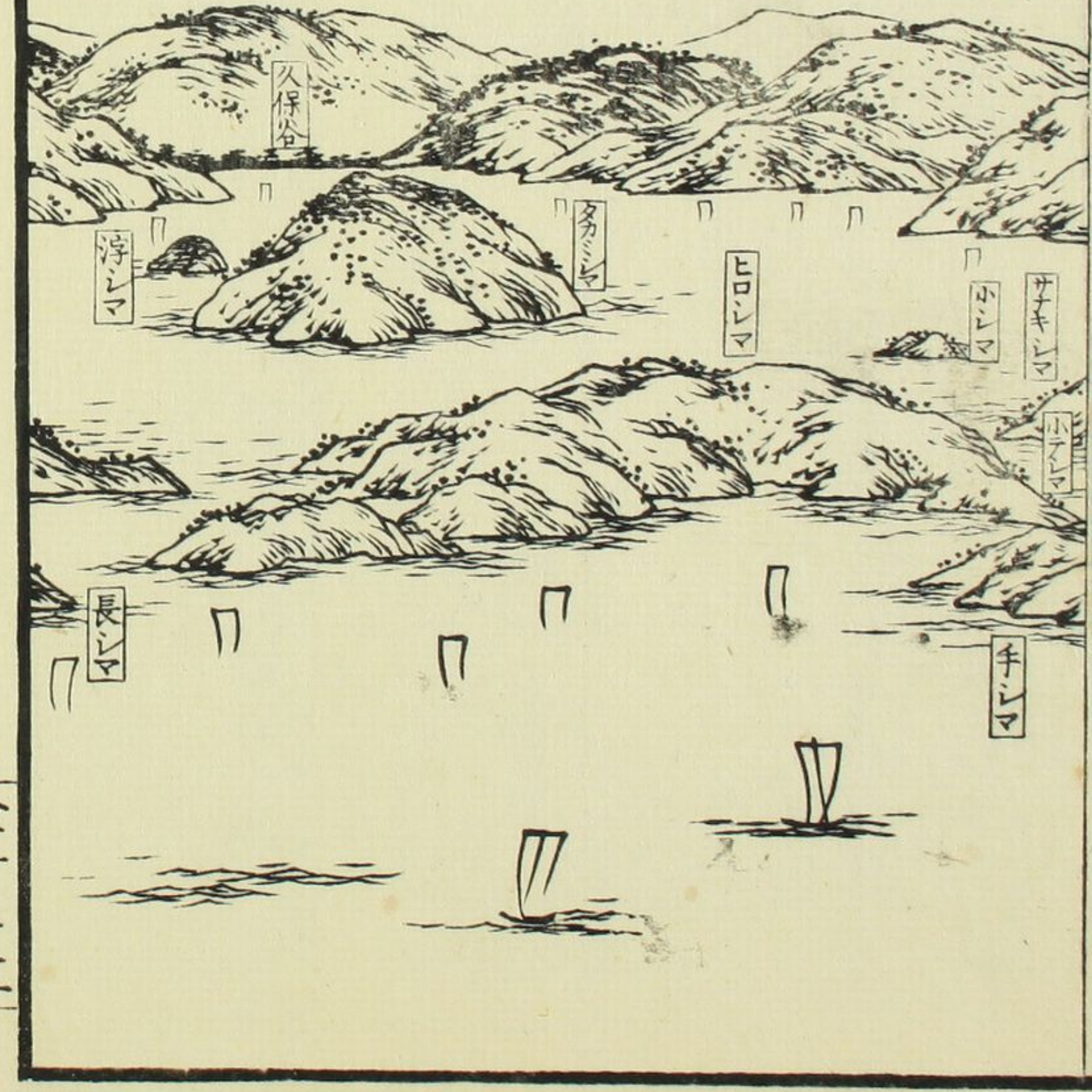




小瀬石 月凡十九向  
 與高 月凡廿二回  
 小與嶋 月凡十六回  
 岩 月凡八回  
 宝菜 月凡九回  
 櫃石 月凡五回  
 長石 月凡十六回  
 柳 依 月凡十回  
 向 月凡八回  
 牛 高 月凡八回  
 一の所あり 此 一 谷の  
 形 似る 巨巖あり 此  
 一 所 あり 此 一 所 あり  
 中 一 あり 此 一 所 あり  
 中 一 あり 此 一 所 あり

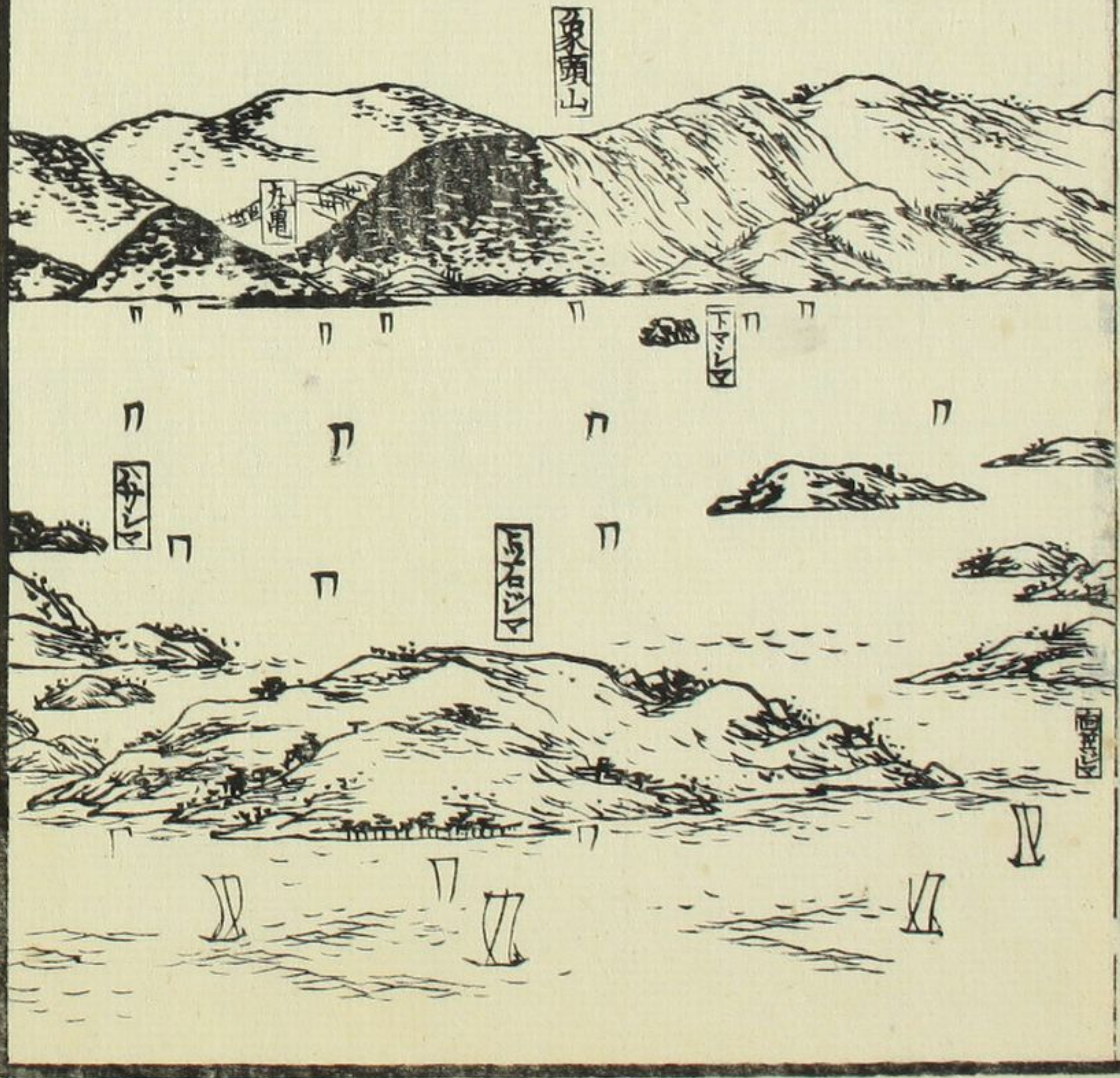


下津井浦 後山  
 翁崎より南海  
 肥望之國  
 塩飽嶋之大概  
 廣島 高尾真間  
 中嶋 月凡十回  
 高尾 月凡五回  
 佐柳 月凡五回  
 牛嶋 月凡廿二回  
 小嶋 月凡十回  
 小嶋 月凡十回  
 小嶋 月凡十回  
 小嶋 月凡十回  
 小嶋 月凡十回



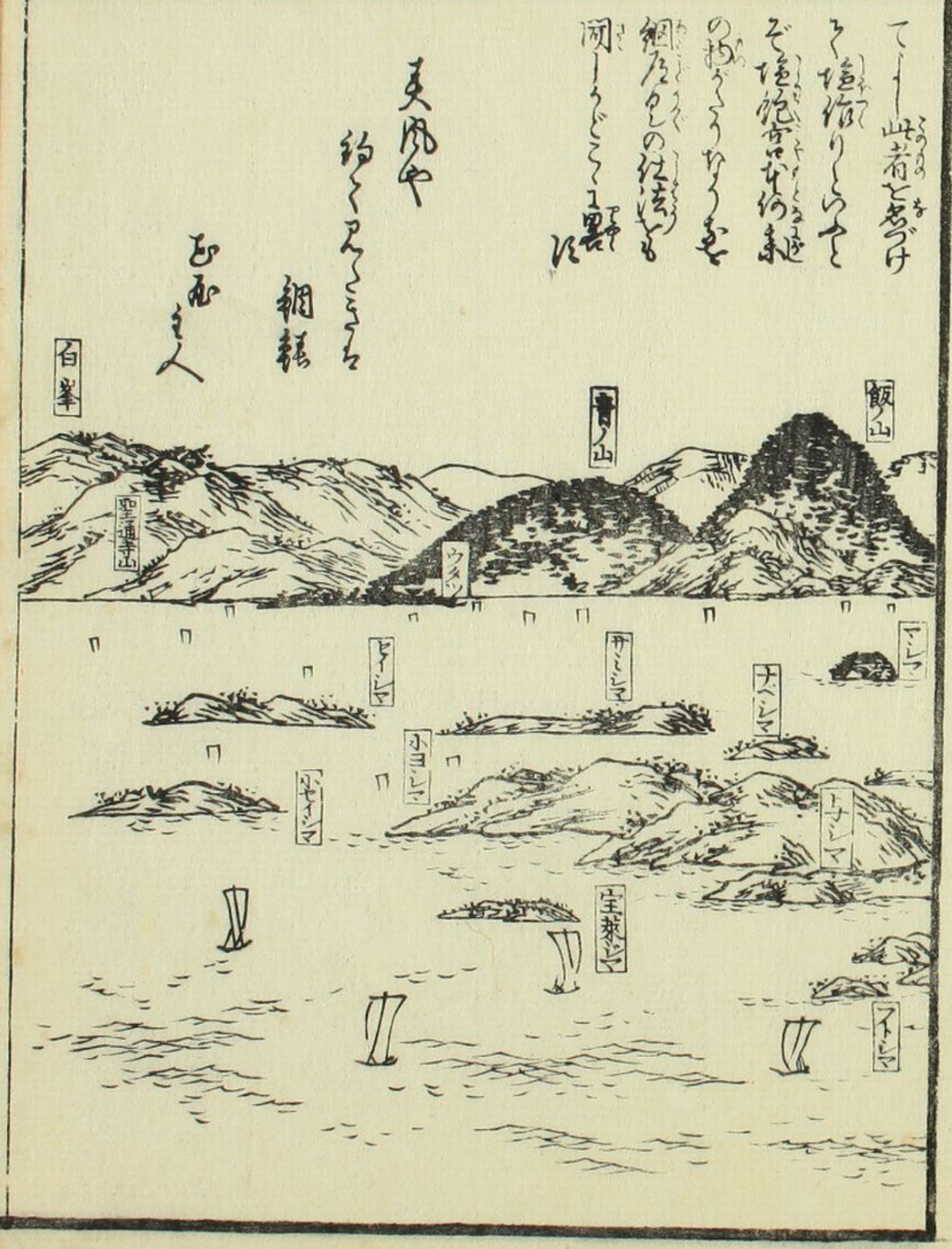


ちんれん大破獲  
 丸後海の結船のつ  
 ともあつて垂  
 に標しつゝ  
 快春の西の  
 半時海の  
 網結しつゝ  
 新海  
 網結しつゝ  
 考しつゝ  
 の長外  
 是し考つて  
 やつて網結しつゝ  
 がいて網結しつゝ



金一ノ五十一

て一此者とあつて  
 と地所りつゝ  
 と地所りつゝ  
 の地所りつゝ  
 網結しつゝ  
 網結しつゝ



五月  
 約つて  
 網結  
 石

百峯

飯山

飯山

飯山

飯山

飯山

飯山



手嶋 廢島の西 小半嶋 山のてつて人田島

依柳島 廣島の城より其間凡一里余 小島 下二面島 依柳嶋の南あり

高見島 廣島の正南あり其間凡一里余 齒節岩 高見島の東あり

牛島 本島の南三十丁計あり島回り凡二十回計ト云 沙弥島 波る夏凡二十町

沙彌島 牛島の辰の方あり狭峯も云 理海大師誕生の地ト云 尚其田跡あり 兼

狭峯嶋 家集 や真嶋 通ふ海士小船行帆あり 青の山 風 為家

夫木集 夕ぐれ 狭峯の嶋 鳴千鳥あり 破道 水 やつらん 頭盛

瀬長嶋 小瀬居島 沙弥島の良あり

與島 本島の東あり 小與嶋 空美嶋 鍋島 二面嶋 羽佐嶋 不登島

岩黒島 櫃石島 長島の東あり其間凡二十丁ト云

金毘羅系請名所圖會卷之一畢



